

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH42M010		精神医学特論(保健医療分野に関する理論と支援の展開) (Special Seminar on Psychiatry(Support Theory and Practice for Health and Medical Care))					医療関連科目群		オンライン(同時双方向型)						
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択		2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	月2	日本語		単独						
担当教員	氏名 堤隆														
	E-mail tsutsumi@oita-u.ac.jp 内線 7477														
授業の概要	本講義では「心の健康の維持」や「心の病気の予防」に関する内容もとり入れながら、「統合失調症」や「アルコール・薬物依存」「認知症」について概説する。また、現在問題となっている「うつ病と自殺」「発達障害」についても言及する。														
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	統合失調症、アルコール・薬物依存、認知症などの精神障害について理解できる								○						
目標2	こうした精神障害の予防やケアについて学ぶことができる								○						
目標3	国内外の精神医療や精神保健について概観できる								○						
目標4	精神医学・精神医療の実践知を心理支援に活用していくことについて考えを深化できる								○						
目標5	以上により、精神医学・精神医療の実践知を心理支援に活用していくことについて考えを深化できる								○						
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)									10						
授業の内容															
1 統合失調症(1):総論															
2 統合失調症(2):各論															
3 発達障害者に対する対策															
4 アルコール問題に対する対策															
5 薬物依存対策															
6 うつ病と自殺防止対策															
7 認知症高齢者に対する対策(1):総論															
8 認知症高齢者に対する対策(2):各論															
9 社会的ひきこもり、ニート、ホームレス															
10 災害時の精神保健															
11 精神保健福祉士、性同一性障害															
12 ターミナルケアと精神保健															
13 地域精神保健の概要															
14 世界の精神保健															
15 精神医学に関するまとめ															
ラーニングポイント	A:知識の定着・確認		○	ミニッツペーパー、ディスカッション			工夫	その他の	能動的な調べ学習やグループ・ディスカッションを通じて、学生の動機づけを高め、深い学びに導く。						
	B:意見の表現・交換														
	C:応用志向														
	D:知識の活用・創造														
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		資料を事前に読んでおく(23h)												
	事後学修		課題学習(レポート)(23h)												
	想定時間合計		46												
教科書		教科書を指定しない													
参考書		一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟.最新・精神保健福祉士養成講座2「現代の精神保健の課題と支援」(中央法規)2021(ISBN 9784805882535) 尾崎紀夫 標準精神医学 第9版 (医学書院)2024(ISBN 9784260053341)													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	レポート		70%	○	○	○	○	○					
	授業への積極的な参加		30%	○	○	○	○	○					
注意事項		なし											
備考		この科目は臨床心理士受験資格取得に関するD群科目であり、公認心理師受験資格取得に関する必修科目である。											
リンク													
		URL											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式						
HH42P014		臨床心理面接特論Ⅰ(心理支援に関する理論と実践) (Special Seminar on Clinical InterviewⅠ(Theory and Practice of Psychological Support))					心理関連科目群		対面						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態					
選択	2	1	福祉健康科学研究科	前期	月2	日本語		英語		オムニバス					
担当教員	氏名 渡辺 亘、増田成美														
	E-mail wwata@oita-u.ac.jp(渡辺) nmasuda@oita-u.ac.jp(増田) 内線 7585(渡辺)														
授業の概要	心理専門職の主要な活動の一つである面接による心理支援(心理療法)について、学派の違い、要支援者の年齢や心理的な健康度の違い、支援の場や領域の違いを超えて共通する基本的理論および技法を学んだ上で、力動論的アプローチや認知行動的アプローチ等を習得することを目的とする。また、事例等の臨床素材による討議を行い、学びの高度化・具体化を進める。														
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	
目標1	心理療法の実践に際して必要となる、基本的な理論・技法・姿勢などを理解する							○	○						
目標2	心理に関する相談・助言・指導等の進め方を習得する							○							
目標3	支援を要する者の特性や状況に応じた支援方法について理解する							○							
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)								7	3						
授業の内容															
1	心理療法とは：定義と歴史(渡邊)														
2	基本的な関わりと倫理(渡邊)														
3	力動論的アプローチ：①目的(渡邊)														
4	力動論的アプローチ：②方法(渡邊)														
5	力動論的アプローチ：③プロセス(渡邊)														
6	力動論的アプローチ：④事例にふれる(渡邊)														
7	力動論的アプローチ：⑤効用と限界(渡邊)														
8	認知行動論的アプローチ：①目的(増田)														
9	認知行動論的アプローチ：②方法(増田)														
10	認知行動論的アプローチ：③プロセス(増田)														
11	認知行動論的アプローチ：④事例にふれる(増田)														
12	認知行動論的アプローチ：⑤効用と限界(増田)														
13	その他のアプローチ：①動機づけ面接の実践(増田)														
14	その他のアプローチ：②動機づけ面接の実践(増田)														
15	その他のアプローチ：③症例から学ぶアプローチ方法(増田)														
ラーニンググループ	A:知識の定着・確認	○	レポート課題等により知識の定着と確認を促す。討議により意見の表現					工夫その他の	レポートを課し、省察や調べ学習を促す。また、支援の事例を提示し、具体的な学びを促す。						
	B:意見の表現・交換	○	・交換を促す。理論や概念を実際の支援に支援に活用することについて												
	C:応用志向	○	具体的な学びを展開する。												
	D:知識の活用・創造														
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		次回の内容について教科書・参考書を読み、全容を大まかにつかむとともに、疑問点を明確にする(20h)												
	事後学修		授業の内容についての考察をレポート等にまとめるとともに、教科書・参考書等により必要な調べ学習を行う(25h)												
	想定時間合計		45												
教科書	鐘幹八郎・名島潤慈(2000)「新版 心理臨床家の手引き」 誠信書房 ISBN 9784414416435 小松貴弘・渡辺亘・中村博文(2019)「時間のかかる営みを、時間をかけて学ぶための心理療法入門」 創元社 ISBN978-4422117218														
参考書	鐘幹八郎ほか(1998)「精神分析的心理療法の手引き」 誠信書房 ISBN978-4414401844 蟹江絢子・堀越勝(2020)『スーパービジョンで磨く認知行動療法 うつ病篇：全セッションの記録』創元社 ISBN978-4-422-11710-2 C3011														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	討議への積極的参加		50%	○	○	○							
	レポート		50%	○	○	○							
注意事項	受講は臨床心理学コースの大学院生に限る。												
備考	この科目は臨床心理士及び公認心理師受験資格取得のための必修科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	公認心理師、臨床心理士												
実務経験を いかした教育内容	心理支援の実務について具体的に学ぶ												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式					
HH42P015		臨床心理面接特論Ⅱ (Special Seminar on Clinical InterviewⅡ)					心理関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択	2	1	福祉健康科学研究科	後期	月2	日本語		英語		単独				
担当教員	氏名 渡辺 亘													
	E-mail wwata@oita-u.ac.jp 内線 7585													
授業の概要	臨床心理士の主要な活動の一つである面接による心理支援（心理療法）について、「臨床心理面接特論Ⅰ」で習得した基本的内容をより実践的な水準に高めていく。特に、発達段階、人格水準、援助の場といったことに即した支援のあり方や工夫について学びを深める。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 要支援者の問題の性質に応じた心理支援を理解する								○	○					
目標2 要支援者の発達段階に応じた心理支援を理解する								○						
目標3 支援の場（病院、学校、福祉機関など）に応じた心理支援を理解する								○						
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度（計10）								7	3					
授業の内容														
1 児童期の心理療法（遊戯療法）：①概要														
2 児童期の心理療法（遊戯療法）：②目的と方法														
3 児童期の心理療法（遊戯療法）：③プロセス														
4 児童期の心理療法（遊戯療法）：④事例にふれる														
5 思春期・青年期の心理療法：①概要														
6 思春期・青年期の心理療法：②目的と方法														
7 思春期・青年期の心理療法：③事例にふれる														
8 成人期・中年期の心理療法：①概要														
9 成人期・中年期の心理療法：②目的と方法														
10 成人期・中年期の心理療法：③事例にふれる														
11 重篤な問題への支援：①人格障害の場合														
12 重篤な問題への支援：②精神病圏の場合														
13 重篤な問題への支援：③事例にふれる														
14 場を意識した支援														
15 まとめ・心理面接に関する今後の展望														
ラーニング目標	A:知識の定着・確認				○	レポート課題等により知識の定着と確認を促す。討議により意見の表現・交換を促す。理論や概念を実際の支援に支援に活用することについて具体的な学びを展開する。	工夫その他の	レポートを課し、省察や調べ学習を促す。また、支援の事例を提示し、具体的な学びを促す。						
	B:意見の表現・交換				○									
	C:応用志向				○									
	D:知識の活用・創造				○									
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		次回の内容について教科書・参考書を読み、全容を大まかにつかむとともに、疑問点を明確にする（20h）											
	事後学修		授業の内容についての考察をレポート等にまとめるとともに、教科書・参考書等により必要な調べ学習を行う（25h）											
	想定時間合計		45											
教科書		「精神分析的心理療法の手引き」 鐘幹八郎（監） 誠信書房（2019）ISBN 978-4414401844 「時間のかかる営みを、時間をかけて学ぶための心理療法入門」 小松・渡辺・中村（編著） 創元社（2019） ISBN978-4422117218												
参考書														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	討議への積極的参加		50%	○	○	○							
	レポート		50%	○	○	○							
注意事項	受講は臨床心理学コースの大学院生で、臨床心理面接特論Ⅰ（心理支援に関する理論と実践）の単位を取得した者に限る。												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得のための必修科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	公認心理師、臨床心理士												
実務経験を いかした教育内容	心理支援の実務について具体的に学ぶ												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH42P013		臨床心理学特論Ⅱ (Special Seminar on Clinical PsychologyⅡ)					心理関連科目群		対面						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態					
選択	2	1	福祉健康科学研究科	後期	月3	日本語				オムニバス					
担当教員	氏名 河野伸子/池永恵美/志方亮介														
	E-mail n-kawano@oita-u.ac.jp/m-ikenaga@oita-u.ac.jp/r-shikata@oita-u.ac.jp 内線 7612/6107/6169														
授業の概要	心理臨床においてはさまざまな領域において多様なアプローチが用いられている。本授業では、「臨床心理学特論Ⅰ」で学んだ基礎を踏まえ、応用的なアプローチについてとりあげる。														
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	
目標1	多様な領域やアプローチについて、その基本的知識や特性について説明することができる。							○							
目標2	臨床心理学の基礎知識を発展させ、多様な応用的アプローチについて理解している。							○							
目標3															
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)								10							
授業の内容															
1	マインドフルネス療法の概説(河野)														
2	マインドフルネス療法の応用領域(河野)														
3	マインドフルネス療法の実践(呼吸法/食べる瞑想)(河野)														
4	マインドフルネス療法の実践(動きのある瞑想/静坐瞑想)(河野)														
5	マインドフルネス療法を心理専門職としての学びに活かす(河野)														
6	集団心理療法の基礎(池永)														
7	心理劇における役割理論と役割の発展段階(池永)														
8	心理劇の5要素について(池永)														
9	心理劇の技法を深める(ダブル)(池永)														
10	心理劇の技法を深める(ロール・リバース/ミラー)(池永)														
11	遊戯療法(プレイセラピー)の概説(志方)														
12	発達支援における遊びの臨床心理学的意義(志方)														
13	生涯発達支援における遊びの臨床心理学的意義(志方)														
14	表現活動を伴う遊びの臨床心理学的意義(志方)														
15	解決志向アプローチにおける遊び性(志方)														
チェックポイント	A:知識の定着・確認	マインドフルネス療法・集団心理療法・心理劇法などの実際について、グループ活動等を通して学び振り返りを 行う。					工夫その他の	実践的な内容を取り入れることで、体験的な理解を促す。また、レポートを課すことで、自身の体験を省察し、より理解を深める手立てとする。							
	B:意見の表現・交換														
	C:応用志向														
	D:知識の活用・創造														
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	「授業の内容」に関する課題を課す。詳細は授業において指示する(15h)													
	事後学修	授業で習った実践の手法を講義外でも実践し記録をつける。各種技法の理論等の文献を精読する。詳細は授業において指示する。(30h)													
	想定時間合計	45													
教科書	資料は適宜配布する。														
参考書	-「サイコドラマの技法」高良聖 岩崎学術出版社(2013年)ISBN978-4-7533-1057-9 他、適宜授業時間中に提示する。														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業内の討議や活動への積極的参加		50%	○	○								
	レポート		50%	○	○								
注意事項	受講は臨床心理学コースの大学院生で、臨床心理学特論Ⅰの単位を取得した者に限る。												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得のための必修科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	臨床心理士 公認心理師(河野伸子・池永恵美・志方亮介)												
実務経験を いかした教育内容	有資格者が実際の臨床場面で用いている心理的技法について実践的に教示している。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42P022		臨床心理実習 A (心理実践実習 D) (Practical Training in Clinical Psychology A(Practical Training in Psychology D))					心理関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択	2	2	大学院福祉健康科学研究科	通年	月3,火2	日本語		英語		複数(共同)				
担当教員	氏名 渡邊亘、溝口剛、河野伸子、池永恵美、渡邊晴美、志方亮介、古長紗恵、増田成美、佐藤百合子、武内珠美、岐部薫、西村薫													
	E-mail m-ikenaga@oita-u.ac.jp 内線 6107													
授業の概要	心理教育相談室(学内施設)において具体的な心理支援の実践を学ぶ。特に、様々な年齢層の要支援者や様々な問題について多くの心理支援を担当しながら、心理学的理解、事例に適合した支援方略の策定と実施、医療や福祉をはじめとする他機関・他領域との連携、さらには職業倫理や法的義務に関する理解を実践レベルに落とし込むことをねらいとする。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 心理支援や検査の実施について、より高度で実践的な内容を身につけ、実践できる。								○	○					
目標2 対象者の状態や問題の性質、置かれた環境の特徴などを総合的に検討し、真に必要な支援について考えることができる								○	○					
目標3 連携やチームアプローチについて、また、倫理や法的義務について、支援実践との関連において理解を具体化できる。								○	○					
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								5	5					
授業の内容														
1 オリエンテーション(支援のシステム、ルール、倫理と法的義務)														
2 電話等による初期対応														
3 問題の見立て														
4 支援方略の策定														
5 心理面接の実施1(導入・初期のかかわり)														
6 心理面接の実施2(展開・中期のかかわり)														
7 心理面接の実施3(終結・後期のかかわり)														
8 心理面接の実施4(助言、指導、ガイダンスによる介入技法)														
9 心理検査の実施1(アセスメントバッテリーの組み方)														
10 心理検査の実施2(適切な施行)														
11 心理検査の実施3(結果の整理と解釈)														
12 心理検査の実施4(フィードバックの進め方)														
13 チームアプローチの実践														
14 他職種連携・地域連携の実践														
15 まとめ(省察及び成果と課題の明確化)														
ラーニング	A:知識の定着・確認		○	口頭試問、体験活動、陪席、学生の過去の体験との紐づけ、調べ学修(文献、インターネット)、Moodleの活用、発表、ディスカッション、相互教授、学びの省察、共同執筆、ロールプレイ、事例研究、心理教育相談室での実習				工夫その他の	「履修ガイド」や学習支援システム(moodle)を積極的に活用し、学習の成果と課題を明確にしつつ、系統的に学びを積み上げていくことを助ける。					
	B:意見の表現・交換		○											
	C:応用志向		○											
	D:知識の活用・創造		○											
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		担当ケースの問題の見立てや支援方略の策定に関連した調べ学修。先調べ学修及び担当ケースの状態等に基づく、問題の見立てや支援方略の策定。使用する可能性のある心理検査の実施法の修得。その他、実習において指示する。15h											
	事後学修		各セッションにおけるケース記録。心理検査報告書。その他、実習において指示する。30h											
	想定時間合計		45											
教科書		「新版 心理臨床家の手引き」 鐘幹八郎ほか 誠信書房(2000)(ISBN:9784414416435)												
参考書		実習において指示する。												

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	上記内容への取り組み		50%	○	○	○							
	最終試験（レポート25%、口述試験25%）		50%	○	○	○							
注意事項	受講は臨床心理学コースの大学院生で、臨床心理士受験資格取得のための必修科目（一年次開講のもの）の全ての単位を取得した者に限る。公認心理師受験資格を得るためには、本科目を含む所定の科目で所定の実習時間を満たす必要がある。												
備考	この科目は臨床心理士及び公認心理師受験資格取得のための必修科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の 有無	○												
教員の 実務 経験	公認心理師、臨床心理士												
教員以外で 指導に関わ る実務経験 者の有無	○												
教員以外の 指導に関わ る実務経験 者	公認心理師、臨床心理士												
実務経験を いかした教 育内容	支援の実際の問題を具体的に学ぶ												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH42P018		臨床心理基礎実習 (Basic Training in Clinical Psychology)					心理関連科目群		対面						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態					
選択	2	1	大学院福祉健康科学研究科	通年	月4,金3,金4,金6	日本語				複数(共同)					
担当教員	氏名 河野伸子、池永恵美、古長紗恵、渡邊晴美、佐藤百合子、岐部薫、北吉直子、有馬圭子														
	E-mail m-ikenaga@oita-u.ac.jp 内線 6107														
授業の概要	本授業では、臨床心理学の基本である面接について、基礎的知識や技法、必要なカウンセラーの態度、相談者の心理の理解、応答の仕方などの基本的事項について学習するとともに、学生間でのロールプレイ実習や模擬心理面接実習といった、実際の面接場面での対応を想定した実習・演習を通じて、実践的な能力を身につけることを目標とする。														
具体的な到達目標															
目標1	クライアントの話を傾聴・理解し、応答する、といった臨床心理面接に関する基本的技法について説明できる。							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標2	上記の技法を習得し、実施することができる。								○						
目標3	クライアントの心理状態に応じて、適切な応答の仕方を選択することができる。								○						
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)									10						
授業の内容															
1 臨床心理面接の原則・倫理															
2 臨床心理面接における話の聴き方															
3 話の中の要素分析の練習(演習)															
4 話の中の要素分析の練習(解説)															
5 フィードバックの練習(演習)															
6 フィードバックの練習(解説)															
7 感情の反射(演習)															
8 感情の反射(解説)															
9 記録のとり方															
10 ロールプレイ記録による討議Ⅰ															
11 ロールプレイ記録による討議Ⅱ															
12 ロールプレイ記録による討議Ⅲ															
13 ロールプレイ記録による討議Ⅳ															
14 ロールプレイ記録による討議Ⅴ															
15 ロールプレイから学んだことについての全体討議															
16 クライアントの来談への期待と不安を理解する															
17 クライアントの訴えの背景にある気持ちを理解する															
18 感情と行動のつながりについて理解する(演習)															
19 感情と行動のつながりについて理解する(解説)															
20 沈黙の意味について考える															
21 クライアントの質問に対する応答の練習															
22 クライアントの自我の強さに応じた面接の方法															
23 心理臨床家に求められる資質とは															
24 模擬心理面接の実施について															
25 模擬心理面接の振り返りⅠ															
26 模擬心理面接の振り返りⅡ															
27 模擬心理面接の振り返りⅢ															
28 模擬心理面接の振り返りⅣ															
29 模擬心理面接の振り返りⅤ															
30 模擬心理面接から学んだことについての全体討議															
ラーニング目標	A:知識の定着・確認		○	体験活動、学生の過去の体験との紐づけ、調べ学修(文献、インターネ					工夫その他の	授業では講義形式ではなく、学生間の討論を中心に進める。またロールプレイ・模擬心理面接を取り入れ、体験的に学びを深める。					
	B:意見の表現・交換		○	ット)、発表、ディスカッション、相互教授、学びの省察、ロールプレ											
	C:応用志向		○	イ											
	D:知識の活用・創造		○												

授業時間外 学修の内容 と想定時間	準備学修											
	事後学修	授業内容について配布資料に基づいて復習する（15h）。自身のロールプレイや模擬面接の記録を作成し、自分自身の面接時の応答や態度について理解を深める（15h）。学びをさらに深めるため面接技術に関する書籍や論文を読む（15h）。										
	想定時間合計	45										
教科書	特に使用しない。適宜、プリントを配布する。											
参考書	適宜紹介する											
成績 評価 の 方法 及 び 評 価 割 合	評価方法	割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10
	授業内での課題の取り組みと討論	50%	○	○	○							
	中間および最終レポート	50%	○	○	○							
注意事項	受講は臨床心理学コースの大学院生に限る。											
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得のための必修科目である。 前期：金3・4限／後期：月4・金6限											
リンク												
	URL											
担当教員の 実務経験の 有無	○											
教員の 実務 経験	公認心理師、臨床心理士											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH41Z001		福祉健康科学特論Ⅰ (Special SeminarⅠ in Welfare and Health Sciences)							オンライン（同時双方向型）					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
必修	2	1	福祉健康科学研究科	前期	月6	日本語		複数(共同)						
担当教員	氏名 片岡晶志、滝口 真、齋藤建児、飯田法子 E-mail mkataoka@oita-u.ac.jp 内線 7457													
授業の概要	本研究科の目的は「地域共生社会の概念を理解し、多角的な方向からその実現を担うことができるバイオニア」を養成することである。そのためには、まず、「福祉健康科学」や「地域共生社会」の概念を確実に理解するとともに、関連する取組の実際を具体的に理解しておく必要がある。この科目では、二年間の学修を始めるにあたり、まず「福祉健康科学」や「地域共生社会」について深く学び、それをもって今後の学修の基礎とすることをねらいとする。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 福祉健康科学の内容およびその意義と独自性について具体的に説明できる。								○	○					
目標2 地域共生社会の概念を整理した上で、重要な理論や方法について説明できる。								○	○					
目標3 地域共生社会の実現に関して注目される複合的問題について理解を深め、介入すべきポイントを示すことができる。								○	○					
目標4 地域共生社会の実現を推進する行政の方針や政策を理解するとともに、専門家として必要な倫理や義務を示すことができる								○	○					
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								5	5					
授業の内容														
1 福祉健康科学の概要：歴史・定義・意義・学問的な位置付け(片岡)														
2 福祉健康科学の内容：目的・対象・方法(片岡)														
3 福祉健康科学の成果と課題：主要な取り組みと今後の展望(片岡)														
4 地域包括ケアシステムの強化と地域共生社会の概念(飯田)														
5 地域共生社会の諸相(1)：対象者の拡大(飯田)														
6 地域共生社会の諸相(2)：総合的な支援の強化と支援のためのネットワークづくり(飯田)														
7 地域共生社会の諸相(3)：複合的な課題(齋藤)														
8 地域共生社会の諸相(4)：地域・コミュニティという視点(齋藤)														
9 地域共生社会実現に向けた取組(1)：全国の先進的・特徴的な取組(齋藤)														
10 地域共生社会実現に向けた取組(2)：大分県での取組(飯田)														
11 複合的問題への対応(1)：どう理解するか(滝口)														
12 複合的問題への対応(2)：どう支援するか(滝口)														
13 ミニ・プレゼンテーション：地域共生社会実現に向けた課題と展望(飯田)														
14 複合的問題への対応(3)(滝口)														
15 ミニ・プレゼンテーション：地域共生社会実現のために必要な資質・能力とは(飯田)														
ラーニング	A:知識の定着・確認	○	ミニッツペーパー、ディスカッション				工	そ	夫	他				
	B:意見の表現・交換	○												
	C:応用志向	○												
	D:知識の活用・創造													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	授業の進行にあわせて指示する。また、課題となる事項について関心をもって調べること。(15h)												
	事後学修	授業の進行にあわせて指示する。また、課題となる事項について関心をもって調べること。(30h)												
	想定時間合計	45												
教科書	なし。資料は適宜配付する。													
参考書	授業の進行にあわせて指示する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	最終レポート		70%	○	○	○	○						
	授業への積極的な参加		30%	○	○	○	○						
注意事項	受講生には積極的な参加を求める。												
備考	なし。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	児童相談所，児童発達支援事業所												
実務経験を いかした教育内容	事例や具体例講義内容に取り入れる												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH41Z002		福祉健康科学特論II (Special SeminarII in Welfare and Health Sciences)							オンライン（同時双方向型）					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
必修	2	1	福祉健康科学研究科	後期	月6	日本語	英語	オムニバス						
担当教員	氏名 渡邊亘、河上敬介、齋藤建児、志方亮介													
	E-mail wwata@oita-u.ac.jp 内線 7585（渡辺）													
授業の概要	福祉健康科学特論Iで得た「福祉健康科学」と「地域共生社会」に関する理解に基づき、健康医科学、社会福祉科学、臨床心理学の専門的な視点や技法がいかに「地域共生社会」の実現に役立つのか、具体的な取組事例（個の支援および地域・コミュニティ支援）にも触れながら深く学ぶ。また、それらの視点を結節させ、連携と協働のもとに、「地域共生社会」を牽引する方策あるいは資質・能力について考究する。これにより、医療、福祉、心理を俯瞰し、多角的・総合的な支援を実践できる知識と技術の伸長を進める。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 専門領域を知るスペシャリスト、他領域を知るジェネラリストの対立線上で専門家の職能を考える意義を説明することができる。								○	○					
目標2 個とコミュニティへの支援に関する自・他領域それぞれの専門性の特徴・意義を確認し、両者の異同を明確にすることができる。								○	○					
目標3 様々な専門性が結節することの意義・重要性を深く理解し、具体的に示すことができる。								○	○					
目標4 結節と連携を牽引し、地域共生社会の実現を担うために必要な資質・能力について明確に示すことができる。								○	○					
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度（計10）								5	5					
授業の内容														
1 職能としての「スペシャリスト」と「ジェネラリスト」（渡邊）														
2 健康医科学は地域共生社会の実現になぜ必要か（河上）														
3 地域共生社会と身体 の健康支援（1）：取組と成果（河上）														
4 地域共生社会と身体 の健康支援（2）：課題と展望（河上）														
5 ディスカッション：健康医科学の視点と技法を地域共生社会の実現に生かすために（河上）														
6 福祉社会科学は地域共生社会の実現になぜ必要か（齋藤）														
7 地域共生社会と生活支援：取組と成果（齋藤）														
8 地域共生社会と生活支援：課題と展望（齋藤）														
9 ディスカッション：福祉社会科学の視点と技法を地域共生社会の実現に生かすために（齋藤）														
10 臨床心理学は地域共生社会の実現になぜ必要か（志方）														
11 地域共生社会と心の健康支援（1）：取組と成果（志方）														
12 地域共生社会と心の健康支援（2）：課題と展望（志方）														
13 ディスカッション：臨床心理学の視点と技法を地域共生社会の実現に生かすために（志方）														
14 連携と協働を牽引するための資質と能力（渡邊）														
15 ミニ・プレゼンテーション：医療・福祉・心理の結節をどのように進めるか（渡邊）														
ラーニングポイント	A:知識の定着・確認		○	ミニツーパー、ディスカッション			工夫 その他 の	節目となる回にはディスカッションを行い、様々な視点や考え方に触れ、自らの立場を明確にし、結束についての学びを深める。また、視聴覚教材や事例を提示し具体的な学びを促す。専門用語等については適宜レジュメを配布し、解説を行う。						
	B:意見の表現・交換		○											
	C:応用志向		○											
	D:知識の活用・創造													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		授業の進行にあわせて指示する。また、課題となる事項について関心をもって調べること。（20h）											
	事後学修		授業の進行にあわせて指示する。また、課題となる事項について関心をもって調べること。（25h）											
	想定時間合計		45											
教科書		資料は適宜配付する。												
参考書		授業の進行にあわせて指示する。												

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	最終レポート		70%	○	○	○	○						
	授業への積極的な参加		30%	○	○	○	○						
注意事項		受講生には積極的な参加を求める。											
備考		ディスカッションやミニ・プレゼンテーションの進め方については講義の中で指示する。											
リンク													
		URL											
担当教員の 実務経験の有無		○											
教員の 実務経験		理学療法士（河上敬介）、臨床心理士・公認心理師（渡邊亘、志方亮介）											
実務経験を いかした教育内容		実務経験に基づいた事例を講義内容やディスカッションに多用する。											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH42P009		産業・労働心理学特論(産業・労働分野に関する理論と支援の展開) (Special Seminar on Industrial and Organizational Psychology(Support Theory and Practice in Industry and Labor Area))					心理関連科目群		対面						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態					
選択	2	2	福祉健康科学研究科	前期	火1	日本語				単独					
担当教員	氏名 増田成美														
	E-mail nmasuda@oita-u.ac.jp 内線 6108														
授業の概要	産業・労働分野における心理臨床・ストレス対策・メンタルヘルスの維持について必要な知識と技術について概説する。受講生が産業・労働分野における心理的問題・心理的援助について理解を深め、心理職としてのアプローチ方法を習得することを目的とし、事例を基に具体的なアプローチについて検討する。														
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	産業・労働分野において心理職が関わる問題を理解する								○	○					
目標2	産業・労働分野に関わる心理職の支援や実践の内容を概説できる								○	○					
目標3															
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)									6	4					
授業の内容															
1	産業・労働心理学の概要														
2	職場のメンタルヘルスに関する法規														
3	労働者のうつ病対策														
4	労働者の自殺対策														
5	労働者の発達障害支援(大人のADHD支援)														
6	労災認定について														
7	ハラスメント対応														
8	職場復帰支援														
9	ストレスチェック														
10	EAPについて														
11	職場環境改善														
12	事例検討①:うつ病														
13	事例検討②:自殺のリスク														
14	事例検討③:休職から休職中の支援														
15	事例検討④:職場復帰前から職場復帰後の支援														
ラーニング	A:知識の定着・確認	☐	レポート課題、事例を基にグループディスカッションを行う。					工夫その他の	質疑応答の時間を設け、担当教員と受講生でディスカッション形式に講義を行う。						
	B:意見の表現・交換	☐													
	C:応用志向	☐													
	D:知識の活用・創造	☐													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	配布資料と参考書、ニュースや新聞を読むなどして労働社会の関心を深める(15h)。													
	事後学修	配布資料と参考資料の復習(15h)。事例検討や課題の復習(15h)。													
	想定時間合計	45													
教科書	適宜資料を配布する。														
参考書	平木典子・松本佳樹(編著)、野島一彦(監修)『公認心理師分野別テキスト5 産業・労働分野 理論と支援の展開』, 創元社, 2019 ISBN:978-4-422-11695-2 森田美弥子・松本真理子・金井篤子(監修)、金井篤子(編)『心の専門家養成講座 第8巻 産業心理臨床実践 個(人)と職場・組織を支援する』, ナカニシヤ出版 2016 ISBN:978-7795-1064-9														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	講義への積極的参加	20%	○	○								
	ミニレポート	30%	○	○								
	学期末レポート	50%	○	○								
注意事項	なし											
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得に関するC群科目であり、公認心理師受験資格取得に関する必修科目である。											
リンク												
	URL											
担当教員の 実務経験の有無	○											
教員の 実務経験	臨床心理士、公認心理師											
実務経験を いかした教 育内容	復職にまつわる心理支援を担った経験を基に、事例と体験を交えながら講義を行う。											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式						
HH42P016		臨床心理査定演習Ⅰ (心理的アセスメントに関する理論と実践) (Seminar on Assessment of Clinical PsychologyⅠ (Theory and Practice of Psychological Assessment))					心理関連科目群		対面						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態					
選択	2	1	福祉健康科学研究科	前期	火1	日本語		英語		複数(共同)					
担当教員	氏名 佐藤晋治、溝口剛、佐藤百合子														
	E-mail ssato@oita-u.ac.jp, t-mizo@oita-u.ac.jp 内線 7531 (佐藤)、7522 (溝口)														
授業の概要	心理専門職の実践における心理的アセスメントの意義、心理的アセスメントに関する理論と方法をふまえた上で、それらを心理に関する相談、助言、指導等へと応用するスキルの習得を目指す。特に施行・解釈にあたって十分な習熟と訓練が必要とされている知能・認知機能検査については、模擬事例を分析・解釈すること、また学生自らが実際に知能・認知機能検査、適応行動や感覚に関する検査を実施し、結果を整理して所見及び報告書を書き、被験者等へのフィードバックする作業を重ねることを通して、被験者の主訴や発達のニーズの背景を総合的にアセスメントし、支援計画を提案していく高度に実践的な能力を養成する。														
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	知能・認知能力検査などを正しく施行し、適切に結果を処理し、実践的総合的に解釈できる。							○							
目標2	検査データから根拠をもって発達のニーズの背景を総合的にアセスメントすることができる。							○							
目標3	結果を報告書の形で適切に記述し、実践的な支援に結び付けることができる。							○							
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度 (計10)								10							
授業の内容															
1 ガイダンス。日本版WISC- Vの概要 (WISC-IVも含む)															
2 日本版WISC- V心理統計法の基礎知識。結果の処理法。															
3 日本版WISC- V事例の解釈 (所見)と報告書の書き方 (概説)															
4 日本版WISC- V事例の解釈 (所見)と報告書の書き方 (演習) 1 (小学生の事例)															
5 日本版WISC- V事例の解釈 (所見)と報告書の書き方 (演習) 2 (中学・高校生の事例)															
6 受講者の作成した報告書を用いて、フィードバック面接のロールプレイ 1 : WISC- V 検査結果 (小学生の事例) の解釈を中心に															
7 受講者の作成した報告書を用いて、フィードバック面接のロールプレイ 2 : WISC- V 検査結果 (中学・高校生の事例) の解釈を中心に															
8 受講者の作成した報告書を用いて、フィードバック面接のロールプレイ 3 : WAIS- V 検査結果 (青年期の事例) の解釈を中心に															
9 受講者の作成した報告書を用いて、フィードバック面接のロールプレイ 4 : WAIS- V 検査結果 (成人期の事例) の解釈を中心に															
10 受講者の作成した報告書を用いて、フィードバック面接のロールプレイ 5 : WPPSI-III検査結果の解釈を中心に															
11 受講者の作成した報告書を用いて、フィードバック面接のロールプレイ 6 : WISC- V 検査結果 (小学生の事例) のフィードバックの仕方を中心に															
12 受講者の作成した報告書を用いて、フィードバック面接のロールプレイ 7 : WISC- V 検査結果 (中学・高校生の事例) のフィードバックの仕方を中心に															
13 受講者の作成した報告書を用いて、フィードバック面接のロールプレイ 8 : WAIS-IV検査結果 (青年期の事例) のフィードバックの仕方を中心に															
14 受講者の作成した報告書を用いて、フィードバック面接のロールプレイ 9 : WAIS-IV検査結果 (成人期の事例) のフィードバックの仕方を中心に															
15 受講者の作成した報告書を用いて、フィードバック面接のロールプレイ 1 0 : WPPSI-III検査結果のフィードバックの仕方を中心に															
ラーニング目標	A:知識の定着・確認		○		予習、復習、宿題、体験活動、調べ学修 (文献、インターネット)、Moodleの活用、プレゼンテーション、ディスカッション、相互教授 (ピアインストラクション)、学びの省察、ロールプレイ、事例研究					工 夫 そ の 他 の 受け身的に講義を受講するのではなく、学生自らが実際に検査を実施し、結果を整理し、所見及び報告書を書き、フィードバックする作業、あるいは講義中の討論を通して、高度に実践的なアセスメント能力を養成する。					
	B:意見の表現・交換		○												
	C:応用志向		○												
	D:知識の活用・創造		○												
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		事例については、刊行されている文献等から選択し、分析・所見及び報告書作成の上順次授業で扱っていく。(15時間程度)												
	事後学修		学修した内容を振り返り、授業で扱った内容や関連する課題について論文、書籍、インターネット等により「調べ学修」に取り組むこと。(30時間程度)												
	想定時間合計		45												
教科書		上野一彦・松田修・小林 玄・木下智子2015 日本版WISC-IVによる発達障害のアセスメント 日本文化科学社 (ISBN : 9784821063710) 辻井正次・明航 光宜・染木 史緒・伊藤大幸他(編集) 2014 発達障害児者支援とアセスメントのガイドライン 金子書房 (ISBN : 9784760832576)													
参考書		フラナガン、D.P他 2014 エssenシャルズWISC-IVによる心理アセスメント 日本文化科学社 (ISBN : 4821063689) ナグリエリ、J.A 2010 エssenシャルズDN-CASによる心理アセスメント 日本文化科学社 (ISBN : 9784821063642) 前川久男ほか 2017 日本版DN-CASの解釈と事例 日本文化科学社													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への取り組み	60%	○	○	○							
	自分が担当した事例についての最終レポート	40%	○	○	○							
注意事項	知能認知能力検査（ウェクスラーファミリー、KABC-II、DN-CASなど）、適応行動や感覚に関する検査（Vineland-II適応行動尺度、CLISP-dd、感覚プロファイルなど）の基礎（実施方法）は習得済みであること。受講は臨床心理学コースの大学院生に限る。											
備考	この科目は公認心理師及び臨床心理士の受験資格取得のための必修科目である。 Moodleを閲覧できる媒体（スマホ、タブレット端末、ノートPCなど）を持参すること。また少なくとも週に1度はMoodleのこの科目のページを閲覧すること。											
リンク												
	URL											
担当教員の 実務経験の有無	○											
教員の 実務経験	佐藤晋治（臨床心理士）、溝口剛（公認心理師、臨床心理士）、佐藤百合子（公認心理師、臨床心理士）											
実務経験を いかした教 育内容	臨床心理査定に関する演習を担当教員の实務経験に基づいて行う。											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式					
HH42P017		臨床心理査定演習Ⅱ (Seminar on Assessment of Clinical PsychologyⅡ)					心理関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択	2	1	福祉健康科学 研究科	後期	火1	日本語	英語	単独						
担当教員	氏名 溝口剛 E-mail t-mizo@oita-u.ac.jp 内線 7522													
授業の概要	心理専門職の実践における心理的アセスメントの意義、心理的アセスメントに関する理論と方法をふまえた上で、それらを心理に関する相談、助言、指導等へと応用するスキルの習得を目指す。特に施行・解釈にあたって十分な習熟と訓練が必要とされている投影法については、他の性格検査とバッテリーを組んだ模擬事例を分析・解釈すること、また学生自らが実際に複数の性格検査を組み合わせて実施し、結果を整理し、所見を書く作業を重ねることを通して、高度に実践的なパーソナリティのアセスメント能力を養成する。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	投影法等の性格検査を正しく施行し、適切に結果を処理し、実践的総合的に解釈できる。							○						
目標2	検査データから根拠をもってパーソナリティをアセスメントすることができる。							○						
目標3	結果を報告書の形で適切に記述し、実践的支援に結び付けることができる。							○						
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								10						
授業の内容														
1	投影法における検査者－被検査者関係ならびに日常生活との連続性													
2	模擬事例①(青年期)の呈示[課題:スコアリング]													
3	模擬事例①のスコアリング確認[課題:集計、所見作成]													
4	模擬事例①の解釈(所見発表)													
5	模擬事例②(成人期)の呈示[課題:スコアリング]													
6	模擬事例②のスコアリング確認[課題:スコアリング修正]													
7	模擬事例②のスコアリング確認[課題:集計、所見作成]													
8	模擬事例②の解釈(所見発表)													
9	投影法を中心とした性格検査の実施と分析・解釈													
10	パーソナリティのアセスメントを施した事例①(健常成人)の発表・討論													
11	パーソナリティのアセスメントを施した事例②(神経症水準)の発表・討論													
12	パーソナリティのアセスメントを施した事例③(人格障害水準)の発表・討論													
13	パーソナリティのアセスメントを施した事例④(精神病水準)の発表・討論													
14	パーソナリティのアセスメントを施した事例⑤(発達障害)の発表・討論													
15	事例検討													
チェックポイント	A:知識の定着・確認	○	予習、復習、宿題、体験活動、プレゼンテーション、ディスカッション					工夫その他の	受身的に講義を受講するのではなく、学生自らが実際に検査を実施し、結果を整理し、所見および報告書を執筆し、講義中の討論を通して、高度に実践的なアセスメント能力を養成する。					
	B:意見の表現・交換	○	相互教授(ピアインストラクション)、学びの省察、ロールプレイ、事例研究											
	C:応用志向	○												
	D:知識の活用・創造	○												
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	事例については、授業時間外に各自で協力者に心理検査を依頼・実施し、分析・所見作成の上順次授業で発表していく。(15時間程度)												
	事後学修	学習した内容を振り返り、授業で扱った内容や関連する課題について論文・書籍等で確認するなどして「調べ学習」に取り組むこと。(30時間程度)												
	想定時間合計	45												
教科書	片口安史 1987 改訂新・心理診断法 金子書房 (ISBN: 9784760825486) 高橋雅春・高橋依子 1986 樹木画テスト 文教書院 (ISBN: 9784762827044)													
参考書	コッホ、K. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男(訳) 2010 バウムテスト第3版－心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究－ 誠信書房 (ISBN: 9784414414400) 馬場禮子 1995 ロールシャッハ法と精神分析－継起分析入門－ 岩崎学術出版社 (ISBN: 9784753399017)													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への取り組み、課題遂行状況、発表・討論の状況		60%	○	○	○							
	ならびに自分が担当した事例についての最終レポート		40%	○	○	○							
注意事項	受講は臨床心理学コースの大学院生に限る。 質問紙法（TEG、GHQ、Y-Gなど）や投影法（描画法、SCT、ロールシャッハ・テストなど）の基礎は習得済みであること。												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得のための必修科目である。												
リンク	URL												
担当教員の 実務経験の 有無	○												
教員の 実務 経験	臨床心理士、公認心理師												
実務経験を いかした教 育内容	担当教員の臨床経験（事例）を交えて、実践的な演習を行う。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42P004		神経生理心理学特論 (Special Seminar on Neuropsychology and Psychophysiology)					心理関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	火2	日本語	英語	単独						
担当教員	氏名 村上裕樹													
	E-mail murakami-hiroki@oita-u.ac.jp 内線 6106													
授業の概要	神経・生理心理学における国際的に最先端の研究に触れ、最新の知見を学ぶ。さらに実際の研究論文を精読し、その知見についてディスカッションすることで、研究を発展させる創造力を身につける。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	神経・生理心理学におけるさまざまな領域の知見について説明することができる。								○					
目標2	神経・生理心理学論文を読解し、説明することができる。								○					
目標3	神経・生理心理学の研究知見についてディスカッションし、研究を発展させるアイデアを提案することができる。								○					
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度 (計10)								10						
授業の内容														
1	神経生理心理学概説													
2	自律神経活動、内分泌を指標に用いた研究													
3	心拍変動性を指標に用いた研究													
4	炎症性サイトカインを指標に用いた研究													
5	脳構造解析を用いた研究													
6	ポジトロン断層撮影法を用いた研究													
7	感情制御に関する脳画像研究													
8	心の理論に関する脳画像研究													
9	脳刺激法を用いた研究													
10	ニューロ・フィードバックを用いた研究													
11	島皮質の損傷例に関する研究													
12	前頭前野の損傷例に関する研究													
13	神経生理心理学的指標を用いた研究の紹介													
14	神経生理心理学的指標を用いた研究の討議													
15	神経生理心理学的指標を用いた研究の討議													
ラーニングポイント	A:知識の定着・確認		能動的調べ学修、授業でのディスカッション。				工夫その他の	神経・生理心理学に関する能動的な調べ学習やグループ・ディスカッションを通じて、学生の動機づけを高め、深い学びに導く。						
	B:意見の表現・交換													○
	C:応用志向													○
	D:知識の活用・創造													○
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		ディスカッションに備え、文献の精読を必要とする (7.5h)。											
	事後学修		授業で学んだことについての復習をし、紹介された文献について精読することで理解を深める (45h)。											
	想定時間合計		53											
教科書	なし。適宜資料を配布する。													
参考書	講義中に適宜紹介する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業内の討議や活動への積極的参加		50%	○	○	○							
	レポート		50%	○	○	○							
注意事項	積極的に議論に参加し、自分の意見を述べること。												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得のためのB群科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の実務 経験	公認心理師												
実務経験を いかした教育内容	専門性や実務経験を活かして、研究や研究知見を応用することの重要性について説明する。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式	
HH42P026		集団心理療法特論 (Special Seminar on Group therapy)					心理関連科目群		対面	
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態		
選択	2	M1、M2	福祉健康科学研究科	前期	火5	日本語		複数(共同)		
担当教員	氏名 池永恵美・河野伸子・古長紗恵									
	E-mail m-ikenaga@oita-u.ac.jp 内線 6107									
授業の概要	本授業では、医療、福祉、心理等の視点から発達障害児・者が抱える困難を総合的に理解した上で、臨床心理学的に支援するための方法について学ぶことを目的とする。また、支援方法として特に集団心理療法的アプローチについて学び、集団心理療法の基礎的理論及び、実際の支援方法について体験的に学び、理解を深める。									
具体的な到達目標										
目標1	発達障害児・者が社会生活の中で抱える様々な困難を心理・医療・福祉の切り口を総合して理解することができる。						○			
目標2	発達障害児・者に対する集団心理療法的アプローチの概要・意義について説明することができる。						○			
目標3	発達障害児・者に対する集団心理療法における心理的支援・介入を実施することができる。						○	○		
目標4										
目標5										
目標6										
目標7										
目標8										
目標9										
目標10										
各DPへの関連度(計10)							5	5		
授業の内容										
1 発達障害児・者の抱える困難とは(1)乳幼児期・学齢期										
2 発達障害児・者の抱える困難とは(2)思春期・青年期以降										
3 集団心理療法の基礎(1)概要(治療機序と治療要因)										
4 集団心理療法の基礎(2)個人心理療法と集団心理療法の違い										
5 集団心理療法の基礎(3)種々の集団心理療法について										
6 集団心理療法の基礎(4)対象者の選定、プログラム立案の視点										
7 集団心理療法の基礎(5)活動における工夫・配慮とは										
8 集団心理療法の展開(1)発達障害児・者への集団心理療法の適用とその意義										
9 集団心理療法の展開(2)集団場面でのクライアントの行動の理解と参加者間の相互作用										
10 集団心理療法の展開(3)セラピストの役割										
11 集団心理療法の展開(4)問題場面へのセラピストの介入										
12 集団心理療法の展開(5)グループの運営・管理の視点										
13 集団心理療法の展開(6)グループの発達を理解する										
14 集団心理療法の実践上の留意点										
15 授業のまとめと振り返り										
ラーニング目標	A:知識の定着・確認				○	体験活動、調べ学修、ディスカッション、相互教授、学びの省察、ロールプレイ、事例研究	工夫その他の	実際に発達障害者の集団心理療法に参加し、集団心理療法について体験的に学びを深める。		
	B:意見の表現・交換				○					
	C:応用志向				○					
	D:知識の活用・創造				○					
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		集団心理療法に関する書籍・論文に目を通すこと(15h)							
	事後学修		実践を振り返ること、集団心理療法に関する書籍・論文に目を通すこと(30h)							
	想定時間合計		45							
教科書	なし									
参考書	適宜指示する。									

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への積極的参加		50%	○	○	○							
	レポート		50%	○	○	○							
注意事項	なし												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得に関するE群科目である。臨床心理学コースの学生のみ受講可能である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	公認心理師・臨床心理士												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)						区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42M001		健康医科学特論 (Basic biomedical sciences)						医療関連科目群		オンライン(同時双方向型、オンデマンド)					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態					
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	前期	火6	日本語		英語		オムニバス					
担当教員	氏名 徳丸治(代表)、濱田文彦、花田俊勝、松尾哲孝、 紀瑞成														
	E-mail ostokuma 内線 7972														
授業の概要	病者に対する安全で適切な医療や科学的に健全な生命科学研究を実施するためには、正常な人体の構造や機能を理解することが不可欠である。これらの理解のためには解剖学、生化学、生理学などの基礎医学の理解が必要である。基礎医学の基礎から研究の最前線までを俯瞰して、深く学ぶことを目的とする。														
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 正常な人体の構造と機能の基本について説明ができる。									○						
目標2 現代の基礎医学各分野における研究の動向の概要を説明できる。										○	○				
目標3															
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)									4	3	3				
授業の内容															
1 解剖・組織学特論① 臨床解剖学研究の最前線「オルガノイド(器官様構造体)を用いた生命科学研究(濱田)															
2 解剖・組織学特論② 神経障害性疼痛(Neuropathic pain)に必要な臨床解剖学-体壁・体肢の層的構造と神経走行との発生的関係を中心にして-(濱田・三浦)															
3 解剖・組織学特論③ 研究で使う統計について(濱田・千葉)															
4 解剖・組織学特論④ リンパ学の基礎(紀)															
5 解剖・組織学特論⑤ リンパ学の最前線「癌転移に関わる病態」(紀)															
6 解剖・組織学特論⑥ リンパ学研究の新展開(紀)															
7 生化学特論① 分子細胞生物学の基礎(花田俊)															
8 生化学特論② 分子細胞生物学の最前線「RNA代謝関連分子の生体内機能解析」(花田俊)															
9 生化学特論③ がん遺伝子への挑戦(花田俊)															
10 生化学特論④ マトリックス医学の基礎(松尾)															
11 生化学特論⑤ マトリックス医学の最前線(松尾)															
12 生化学特論⑥ マトリックス医学の新展開(松尾)															
13 生理学特論① 宇宙医学の基礎(徳丸)															
14 生理学特論② 宇宙医学の最前線(徳丸)															
15 生理学特論③ 宇宙医学の新展開(徳丸)															
ラーニング・イン・グループ	A:知識の定着・確認		○	担当教員の最新論文の読解を含むassignmentを予め与える。各回の講義				工夫その他の	少人数による講義を行うとともに、実際の研究現場における演習を行うことにより、研究の最前線を体感してもらう。						
	B:意見の表現・交換		○	は、それに基づいたプレゼンテーションと議論を中心に展開される。念入りなpreparationと活発なdiscussionを期待する。											
	C:応用志向														
	D:知識の活用・創造														
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		与えられた課題について、文献等の検索・収集を行い、レポートにまとめる(3h)。												
	事後学修		与えられた課題について、文献等の検索・収集を行い、レポートにまとめる(3h)。												
	想定時間合計		90												
教科書	教科書を指定しない														
参考書	参考書を指定しない														

成績 評価 方法 及び 評価 割合	評価方法		割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10
	各課題のレポート		50%	○	○								
	研究現場における演習の議論		50%	○	○								
注意事項	オンラインで実施する。												
備考	なし												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の実務 経験	医師												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42M005		運動器系機能病態解析学特論 (Advanced lectures on pathological analyses of musculoskeletal system)					医療関連科目群		オンライン（同時双方向型、含 対面）					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	火6	日本語		英語		オムニバス				
担当教員	氏名 谷川雅人, 河上敬介, 片岡晶志, 阿南雅也, 大塚章太郎													
	E-mail 阿南:anan-masaya@oita-u.ac.jp 内線 阿南: 6115													
授業の概要	理学療法の対象となることの多い運動器系の病態に関して、それにかかわる分子の役割から病態のメカニズムまで深く理解するとともに、治療法やそのメカニズムの最新の知見を学ぶ。さらに、これらの原因を明らかにするための解析手法の原理を探究することにより、運動器系の基礎から研究の最前線までを俯瞰して、深く学ぶことを目的とする。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	運動器系の機能や病態に関して分子メカニズムから深く理解し、説明できる。							○	○					
目標2	運動器系の病態に対する治療とそのメカニズムに関して最新の知見を説明できる。							○	○					
目標3	運動器系の病態の解析方法に関して最新の研究知見を説明できる。							○	○					
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度（計10）								6	4					
授業の内容														
1 生体分子の反応速度論（谷川）														
2 さまざまな解析法と医療分野への応用（谷川）														
3 生体由来分子を調べる方法・生物物理化学の研究・医療分野への応用（谷川）														
4 脊椎疾患に対する理学療法の最新研究（大塚）														
5 運動器疾患に対するマイオカインの有用性（大塚）														
6 運動模倣薬の最新研究（大塚）														
7 筋の肉眼解剖学的構造から運動や理学療法を考える（河上）														
8 筋病態のメカニズムー筋萎縮と筋損傷を探るー（河上）														
9 筋の病態や治療を検証する（河上）														
10 骨・関節における病態のメカニズムー骨折と骨粗鬆症を探る（片岡）														
11 骨・関節における病態のメカニズムー続発性骨粗鬆症の病態を探る（片岡）														
12 骨・関節における病態のメカニズムー骨粗鬆症の薬物療法と運動療法の効果を探る・骨粗鬆症の最新研究（片岡）														
13 運動機能の評価法最前線（阿南）														
14 変形性膝関節症の病態運動学最前線「変形性膝関節症の機能評価と理学療法応答」（阿南）														
15 変形性膝関節症の最新研究（阿南）														
ラーニングゴール	A:知識の定着・確認		○	講義の中でグループディスカッションを適宜行う。				工夫その他の	運動器機能について、ミクロレベルからマクロレベルまで広く理解するために、それぞれの専門分野に属する教員が、基礎から最新の知見を踏まえた幅広い内容の講義を展開する。					
	B:意見の表現・交換		○											
	C:応用志向													
	D:知識の活用・創造													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		運動器系に関する国内外の文献抄読を通して、最新の理学療法研究に関する世界動向を把握する（15h）。											
	事後学修		運動器系に関する国内外の文献抄読を通して、最新の理学療法研究に関する世界動向を把握する（30h）。											
	想定時間合計		45											
教科書	指定しない													
参考書	指定しない													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への積極的な参加		50%	○	○								
	課題レポート		50%	○	○								
注意事項	なし												
備考	なし												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の実務 経験	理学療法士，医師												
実務経験を いかした教育内容	理学療法士，医師としての実務経験をもつ教員が，臨床・研究・教育経験を生かして，運動器系の病態，治療法やそのメカニズムの最新に知見に関する教育を行っている。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42W003		社会保障政策特論 (Special Seminar on Social Security)					福祉関連科目群		オンライン(同時双方向型)					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択	2	2	福祉健康科学研究科	後期	火6	日本語				単独				
担当教員	氏名 松本由美													
	E-mail matsumoto-yumi@oita-u.ac.jp 内線 6097													
授業の概要	社会保障は私たちの生活の安定や安心を確保する上で重要な役割を担っているが、少子高齢化や家族のあり方の多様ななどの社会経済状況の変化を背景として、さまざまな課題に直面している。授業では、医療・介護保障、所得保障、生活保障(社会保障と雇用との関係)の現状、課題、政策動向等について分析・考察を行う。また、比較の視点から諸外国の社会保障制度・政策について検討し、日本における社会保障のあり方と問題解決策を検討する。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 社会保障制度・政策の現状と今日的な課題について説明することができる。								○						
目標2 社会保障の政策課題を総合的・多角的に検討し、自らの見解を示すことができる。									○					
目標3 国際比較の視点から日本の社会保障制度・政策を捉え、今後のあり方について意見を述べることができる。								○						
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								7	3					
授業の内容														
1 授業の進め方等についてのガイダンス及び社会保障政策の概説														
2 医療保障①(医療保険制度)														
3 医療保障②(医療提供体制)														
4 医療保障③(課題と改革方策)														
5 介護保障①(介護保険制度)														
6 介護保障②(課題と改革方策)														
7 所得保障①(年金制度)														
8 所得保障②(課題と改革方策)														
9 所得保障③(公的扶助等)														
10 生活保障①(社会保障と雇用)														
11 生活保障②(課題と改革方策)														
12 社会保障制度の国際比較①(医療)														
13 社会保障制度の国際比較②(介護)														
14 社会保障制度の国際比較③(所得保障)														
15 まとめ(社会保障政策についての総括)														
ラーニング	A:知識の定着・確認		☐	知識・理解を深めるために、テーマごとに報告とディスカッションを行う。			工夫その他の	統計資料や新聞記事等を活用し、政策動向について理解を深める。						
	B:意見の表現・交換		☐											
	C:応用志向		☐											
	D:知識の活用・創造		☐											
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		各テーマに関する報告を割り当てるので、報告者はテキストの該当部分の概要を作成するとともに、自分の見解を示すことができるよう準備を行うこと。その他の参加者もテキストを熟読し、自分の見解と疑問点をまとめておくこと(30h)。											
	事後学修		毎回の授業後は、報告やディスカッションを踏まえて自らの理解を確認し、必要に応じて追加的な学習を行い、知識を体系的に整理しておくこと(15h)。											
	想定時間合計		45											
教科書	指定しない。授業のなかで適宜紹介する。													
参考書	指定しない。授業のなかで適宜紹介する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への参加の積極度		50%	○	○	○							
	授業における報告		50%	○	○	○							
注意事項	特になし												
備考	特になし												
リンク													
	URL												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式							
HH42W004		福祉政策特論 (Welfare Policy)					福祉関連科目群		オンライン（同時双方向型）							
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	前期	火6	日本語		英語		単独						
担当教員	氏名 志賀信夫															
	E-mail nobu-shiga@oita-u.ac.jp 内線 7727															
授業の概要	本講義の目的は、社会福祉の実践や施策の形成過程を歴史的に概観することから、福祉政策を検討することにある。上記に示した社会福祉は、社会問題に対応するための社会的機能として展開されるとともに、社会の成熟と相まって発展してきた。一方、人口減少社会やグローバリズムの進展によって、社会構造が大きく変動していくなか、社会福祉実践や施策は、あらたな局面を迎えている。社会的構造転換を迎えた現代社会の実態をローカリズムとグローバリズムの視点でとらえ、実践と政策の潮流を検討することを本講義のもう一つの目的とする。															
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7
目標1 今日の雇用や家族、福祉国家のありようを、福祉政策を取り巻く環境として政治経済学的に分析・検討することができる。										○	○					
目標2 福祉政策が直面する社会的排除／包摂について、議論の潮流をふまえたうえで、具体的な実態や課題を把握することができる。										○	○					
目標3 社会科学の基礎について理解、自分なりに説明できる。										○	○					
目標4 自由・平等・貧困の概念的区別について理解し、自分なりに説明できるようになる。										○	○					
目標5 平等の概念について理解し、その理解に基づいて理論を組み立てることができる。										○	○					
目標6																
目標7																
目標8																
目標9																
目標10																
各DPへの関連度（計10）										5	5					
授業の内容																
1 オリエンテーション 福祉政策の問題群																
2 人口減少時代と社会福祉 ー現代社会と人々の暮らしー																
3 社会福祉に関する基本的理解 ー現代社会の生活問題と社会福祉の役割ー																
4 日本社会における社会福祉のあゆみー戦前・戦中・戦後の福祉展開ー																
5 社会福祉に関連する法・制度の仕組みー社会福祉六法の成立過程ー																
6 先進国におけるにおける社会福祉の歩み																
7 先進国における福祉施策の展開																
8 健康社会への挑戦 ーアメリカ健康政策の展開ー																
9 社会福祉基礎構造改革と社会福祉供給システムのパラダイム転換																
10 地域共生社会に関する政策と実践1ー統合ケアと労働統合型社会的企業の可能性ー																
11 地域共生社会に関する政策と実践2 ー住民参加と組織化／ソーシャル・キャピタルの展開と効用ー																
12 福祉政策と研究1ー生活困窮者の支援の実際と研究動向（ホームレスの歩数調査を通して）ー																
13 福祉政策と研究2ー貧困研究と生活構造論ー																
14 福祉政策と研究3ー内発的発展における福祉コミュニティの創出ー																
15 まとめ：福祉政策研究の到達点と展望																
ラーニング	A:知識の定着・確認		○講義内容の理解度の確認や講義に関する意見の交換を行う。また、ディスカッション等をおとしてコメントの発表や討論などを行う。		工夫その他の	映像やデータを用いて、実態を多角的に検討し、主体的な学びを促す。										
	B:意見の表現・交換		○													
	C:応用志向		○													
	D:知識の活用・創造		○													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		講義中に紹介する文献、論文、資料などを収集し、積極的に読んでください。（15h）													
	事後学修		配布資料及び、参考文献などを通じて復習し、学修した内容を深める。（30h）													
	想定時間合計		45													
教科書		教科書は事前に指定しない。														
参考書		毎回、講義前に社会福祉、社会政策など関連文献を5冊紹介する。														

成績 評価 方法 及び 評価 割合	評価方法	割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10
	講義中のプレゼンテーション	25%	○	○								
	講義中のディスカッション	25%	○									
	学期末レポート	50%	○	○								
講義の到達目標ならびに、達成度について成績評価を行う。												
注意事項	特になし											
備考	特になし											
リンク												
	URL											
担当教員の 実務経験の有無	○											
教員の実務 経験	○NP0法人を設立（生活困窮者支援）。											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42W006		児童・家庭福祉特論 (Special Seminar of Child and family welfare)					福祉関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	火6	日本語		単独						
担当教員	氏名 飯田法子													
	E-mail iida-noriko@oita-u.ac.jp 内線 6114													
授業の概要	児童虐待、少年非行、DVなどの子どもや家庭の問題の現状と課題について取り上げ、その具体的な事例についてのケアマネジメントを行い、子どもやその家庭（障害者や高齢者を含む）、特に多問題家族を対象にした包括的支援についてマイクロ・メゾ・マクロの視点から演習を通して学ぶ。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	子どもの権利を保障するためのソーシャルワーク・ケアワークのあり方などについて説明できる。							○	○					
目標2	包括的な支援を展開する上で、必要な事業など社会資源のあり方やネットワークづくりについて説明できる。							○	○					
目標3														
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								5	5					
授業の内容														
1	ガイダンス(児童・家庭福祉論についての概説)													
2	子育て支援の現状と課題													
3	児童虐待の現状と課題													
4	社会的養護を中心にした児童・家庭福祉の現状と課題													
5	子どもの権利擁護1(制度・施策を中心にして)													
6	子どもの権利擁護2(子どもアドボカシーを中心にして)													
7	ケアマネジメント1(アセスメントを中心にして)													
8	ケアマネジメント2(プランニング・実践を中心にして)													
9	包括的支援1(理念・原理及び制度・施策を中心にして)													
10	包括的支援2(ネットワークによる具体的な支援を中心にして)													
11	ケースカンファレンス・チームアプローチ1(子育て・発達障害相談)													
12	ケースカンファレンス・チームアプローチ2(虐待・トラウマ)													
13	具体的な事例(多問題家族)検討													
14	社会資源の開発・活用													
15	まとめ(児童・家庭福祉論について総括する)													
ラーニング	A:知識の定着・確認	☐	事例などについてグループディスカッションをする。					工夫その他の	能動的な調べ学習やグループ・ディスカッションを通じて、学生の動機づけを高め、深い学びに導く。					
	B:意見の表現・交換	☐												
	C:応用志向	☐												
	D:知識の活用・創造	☐												
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	現場を視察して専門家からの包括的な支援の現状と課題について学ぶ。(23h)												
	事後学修	現場を視察して専門家からの包括的な支援の現状と課題について学ぶ。(22h)												
	想定時間合計	45												
教科書	授業において資料を提示する													
参考書	相澤仁編集代表「やさしくわかる社会的養護 全7巻」明石書店 2012～2014 ISBN-13 978-4750337197 菅原ますみ等監修「小児期の逆境の体験と保護的体験」明石書店 2022 ISBN-13 978-4750355016													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業参画（発表）		50%	○	○								
	レポート		50%	○	○								
注意事項													
備考		なし											
リンク													
		URL											
担当教員の 実務経験の有無		○											
教員の 実務経験		児童相談所、乳児院、児童発達支援事業所											
実務経験を いかした教育内容		子どもの権利擁護など子どもの心理面への支援を中心に据えた効果的な実践のあり方について講義する。											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42P001		心理学研究法特論 (Special Seminar on Methodology of Psychology)					心理関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	前期	水1	日本語	英語	オムニバス						
担当教員	氏名 村上裕樹、中里直樹													
	E-mail murakami-hiroki@oita-u.ac.jp 内線 6106													
授業の概要	心理学研究における主要な研究法を詳述するとともに、実際の学術論文を精読することで、国際的に最先端の研究に触れる。また、研究知見についてディスカッションをし、研究を発展させる創造力を身につける。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 心理学におけるさまざまな研究法について説明することができる。									○					
目標2 内外の心理学論文を読解し、研究としての特徴・意義・課題を説明することができる。									○					
目標3 心理学の研究知見についてディスカッションをし、研究を発展させるアイデアを提案できる。									○					
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)									10					
授業の内容														
1 心理学研究法概説(村上)														
2 独立変数の操作(村上)														
3 従属変数の測定、剰余変数の統制(村上)														
4 研究発表(村上)														
5 研究に対する討議(村上)														
6 実験的手法を用いた研究論文の分析と討議(村上)														
7 生理学的指標を用いた研究論文の分析と討議(村上)														
8 実験的手法を用いた研究論文の紹介と討議(村上)														
9 重回帰分析を使用した研究①:理論と方法(中里)														
10 重回帰分析を使用した研究②:論文の分析と討議(中里)														
11 媒介分析、調整効果に関する分析を使用した研究(中里)														
12 因子分析を使用した研究①:理論と方法(中里)														
13 因子分析を使用した研究②:論文の分析と討議(中里)														
14 パス解析を使用した研究①:理論と方法(中里)														
15 パス解析を使用した研究②:論文の分析と討議(中里)														
ラーニングポイントグループ	A:知識の定着・確認		能動的調べ学修、授業でのディスカッション。					工夫 その他	心理学研究法に関する能動的な調べ学習やグループ・ディスカッションを通じて、学生の動機づけを高め、深い学びに導く。					
	B:意見の表現・交換		○											
	C:応用志向		○											
	D:知識の活用・創造		○											
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		ディスカッションに備え、文献の精読を必要とする(7.5h)。											
	事後学修		授業で学んだことについての復習をし、紹介された文献について精読することで理解を深める(45h)。											
	想定時間合計		53											
教科書	なし。適宜資料を配布する。													
参考書	講義中に適宜紹介する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業内の討議や活動への積極的な参加		50%	○	○	○							
	レポート		50%	○	○	○							
注意事項	積極的に議論に参加し、自分の意見を述べること。												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得のためのA群科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	公認心理師												
実務経験を いかした教育内容	専門性や実務経験を活かして、研究や研究知見を応用することの重要性について説明する。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式					
HH42P008		学校臨床心理学特論(教育分野に関する理論と支援の展開) (Special Seminar on Clinical Psychology in School(Support Theory and Practice in School Life))					心理関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択(資格に関しては必修科目でもある)	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	水1	日本語		単独						
担当教員	氏名 渡邊晴美 E-mail watanabe-harumii@oita-u.ac.jp 内線 7894													
授業の概要	学校等の教育領域において心理支援を実践するにあたり必要となる専門的な理論や支援技法を学ぶ。具体的には、教育現場の特徴および現状や課題を概観した後、スクールカウンセラーが学校で行う相談支援、あるいは心理専門職が学校と連携して行う支援について事例を中心に学ぶ。さらに、心理・福祉・医療を見渡した「総合的学校臨床」のあり方についても考える。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 学校臨床に関する専門的な理論や支援技法および学校教育に関する法律について理解を深め説明できる								○	○					
目標2 幼児、児童生徒、保護者、教師と学校コミュニティなどへの関与について理解し、「チーム学校」について説明できる								○	○					
目標3 いじめ、不登校、発達障害、虐待、保護者対応、事件事故後の危機介入など今日的課題と取り組みについて説明できる								○	○					
目標4 教職員、スクールソーシャルワーカー、関係機関との協働や多職種連携について説明できる								○	○					
目標5 心理・福祉・医療の融合を踏まえた「総合的学校臨床」について理解し説明できる								○						
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								5	5					
授業の内容														
1 教育・学校心理学、学校臨床とは(テキスト第1章・第2章)														
2 学習と授業、学級経営について(テキスト第3章・第4章)														
3 生徒指導とキャリア教育(テキスト第5章・第6章)														
4 メンタルヘルス教育、健康教育(テキスト第7章・第8章)														
5 特別支援教育、教育・学校をめぐる新たな問題(テキスト第9章・第10章)														
6 学校・教育システムの連携による支援、多職種連携(テキスト第11章・第12章)														
7 教育・学校心理学に基づく公認心理師に求められる実践と役割(テキスト第13章)														
8 学校臨床における公認心理師の倫理														
9 学校臨床の諸問題 不登校(事例検討 1)														
10 学校臨床の諸問題 不登校(事例検討 2)														
11 事件・事故時における総合的危機介入の事例検討														
12 災害時における総合的危機介入の事例検討(緊急支援スクールカウンセラーの場合)														
13 その他の子どもたちの課題の事例検討(非行、薬物使用、夜間徘徊、摂食障害、ネット依存等)														
14 保護者や家族に対する相談支援														
15 教師や学校に対する支援(コンサルテーション／クラス経営や学年経営・学校経営／一人一人を理解する視点)														
ラーニングログ	A:知識の定着・確認	○実践事例の論文を探し出し、内容的に良いものを選んで、批評しながら					工夫その他の	Problem Based Learningとして、事例を用い実践的に深く学ぶ。そのために専門用語等について能動的に調べ学習を行うことをすすめる。						
	B:意見の表現・交換	○、読むトレーニングを行う。												
	C:応用志向	○また、具体的に、自分がスクールカウンセラーであれば、どのようにア												
	D:知識の活用・創造	セスメントし、対応していくかについて、グループや対話形式での討論を行う。												
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	次回の準備として、事例を読んだり、関連する法令などを調べて、自分なりの検討を行う。 2時間程度の準備学修を行う。												
	事後学修	授業の中でわかったことについては一層調べ学習を行う。わからなかったこと・用語などについても自分で調べ学習を行う。2時間程度は行うこととする。												
	想定時間合計	60												
教科書	「教育・学校心理学」公認心理師スタンダードテキストシリーズ18 2021 下山晴彦・佐藤隆夫・本郷一夫・小野瀬雅人 ミネルヴァ書房 (ISBN978-4-623-08628-3)													
参考書	適宜紹介する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への積極的な参加		60%	○	○	○	○	○					
	レポート		10%	○	○	○	○	○					
	小テスト		30%	○	○	○	○	○					
注意事項	教育現場で活動すること（児童生徒対象、教職員対象、保護者対象、学校コミュニティ対象）をイメージしながら授業に臨むこと。												
備考	この科目は公認心理師受験資格取得に関する必修科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	臨床心理士、公認心理師、スクールカウンセラー（緊急支援SCも含む）、スクールカウンセラースーパーバイザー												
実務経験を いかした 教育内容	学校現場や、心理教育相談室などにおける教育臨床実践から、内容を組み立て、学校・教育現場の空気を感じながら、子どもの成長に資するために働くことができるように進めていく												

ナンバリング			授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式					
HH42P012			臨床心理学特論Ⅰ (Special Seminar on Clinical PsychologyⅠ)					心理関連科目群		対面					
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択		2	1	福祉健康科学研究科	前期	水2	日本語		英語		オムニバス				
担当教員	氏名 渡辺 亘・溝口 剛・渡邊晴美														
	E-mail wwata@oita-u.ac.jp 内線 7585														
授業の概要	心理臨床活動の根幹を成し、心理専門職となるために必ず理解しておかねばならない事項を詳述する。例えば、心理専門職の独自性と専門性、不可欠な資質や知識、倫理、学びと成長のプロセス、社会・地域における役割などである。これらは、心理専門職の訓練過程の最初期に習得すべきもっとも基礎的な内容であり、かつ学派（理論的立場）の違いや活動領域（医療、教育等）の違いを超えて共通する普遍的な事項である。														
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 心理臨床および心理専門職の専門性と独自性について理解し説明できる									○	○					
目標2 心理専門職としての学びや訓練、成長過程について理解した上で、自らが取り組むべきことを明確にできる。									○	○					
目標3															
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度（計10）									5	5					
授業の内容															
1 大分大学における臨床心理学の歴史と特色															
2 心理臨床を学ぶということ															
3 心理臨床家のアイデンティティとその発達															
4 心理臨床家としての基本的資質															
5 心理臨床の専門性と独自性															
6 心理専臨床家の中核的な機能・役割とその意味															
7 クライアントに関わるということ															
8 心理臨床における不易流行															
9 心を見る目と外界（環境・現実）を見る目															
10 クライアントにかかわることとケースマネジメント															
11 経験の組織化と対人関係①：心理療法の原理を問う															
12 経験の組織化と対人関係②：コミュニケーションと経験の性質															
13 経験の組織化と対人関係③：未構成の経験															
14 経験の組織化と対人関係④：ことばと経験の組織化															
15 経験の組織化と対人関係⑤：経験の組織化のあり方と対人関係															
ラーニング	A:知識の定着・確認		○	レポート課題等により知識の定着と確認を促す。討議により意見の表現				工夫その他の	レポートを課し、省察や調べ学習を促す。また、支援の事例を提示し、具体的な学びを促す。						
	B:意見の表現・交換		○	・交換を促す。理論や概念を実際の支援に支援に活用することについて											
	C:応用志向		○	具体的な学びを展開する。											
	D:知識の活用・創造														
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		次回の内容について教科書・参考書を読み、全容を大まかにつかむとともに、疑問点を明確にする（20h）												
	事後学修		授業の内容についての考察をレポート等にまとめるとともに、教科書・参考書等により必要な調べ学習を行う（25h）												
	想定時間合計		45												
教科書		「新版 心理臨床家の手引き」 2018 鍾幹一郎ほか 誠信書房 ISBN9784414416435 「精神分析的心理療法の手引き」 1998 鍾幹一郎（監） 誠信書房 ISBN9784414401844													
参考書		授業において指示する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	討議への積極的参加		50%	○	○								
	レポート		50%	○	○								
注意事項	受講は臨床心理学コースの大学院生に限る。												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得のための必修科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	公認心理師、臨床心理士												
実務経験を いかした教育内容	心理支援の実務に関する知見を深める												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式						
HH42M002		高齢者疾患特論 (Advanced lectures on sciences on disease for the elderly)					医療関連科目群		オンライン（同時双方向型）						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態					
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	水6	日本語		英語		オムニバス					
担当教員	氏名 片岡 晶志、後藤 孔郎、朝井 政治 E-mail mkataoka@oita-u.ac.jp、gotokoro@oita-u.ac.jp、ma-asai@oita-u.ac.jp 内線 7457、6113、7551														
授業概要	高齢者では生理的加齢変化とさまざまな疾患が相乗することにより、機能障害がもたらされる。このため高齢者医療を考える際に、老化と老年病に関する総合的な知識が不可欠である。特に後期高齢者においてその傾向が著しく、個別の疾患や障害の診断や評価はもちろんのこと、それらを総合して患者の全体像を的確に把握する能力が要求される。														
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 老化と老年病を包括的に理解し、説明できる									○	○					
目標2 高齢者の個別の疾患について病態生理を説明できる									○	○					
目標3 実践的な知識を身に着け、医療現場で役立つための知識を説明できる									○	○					
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度（計10）									6	4					
授業の内容															
1 高齢者の身体機能の特徴（運動器系）（片岡）															
2 骨粗鬆症の病態と治療（片岡）															
3 サルコペニアの病態と治療（片岡）															
4 ロコモ・フレイルの病態と治療（片岡）															
5 高齢者の身体機能の特徴（消化器系、免疫系）（後藤）															
6 消化器系疾患の病態と治療（後藤）															
7 消化器系各種がんの病態と治療（後藤）															
8 予防啓発活動、予防検診事業の実践（後藤）															
9 症例検討（消化器疾患）（後藤）															
10 高齢者の身体機能の特徴（呼吸系、心大血管系）（朝井）															
11 呼吸器疾患の病態と治療（朝井）															
12 症例検討（呼吸器疾患）（朝井）															
13 心大血管系疾患の病態と治療（朝井）															
14 症例検討（心大血管系疾患）（朝井）															
15 疾病予防に関する取り組みの実践（朝井）															
ラーニング	A:知識の定着・確認	○	講義中の教員とのディスカッションにより理解を深める。また他者との				工夫その他の	事例を用いた実践的な講義の実施、スライドおよび配布資料による講義形態							
	B:意見の表現・交換	○	討議により、思考を深める。												
	C:応用志向	○													
	D:知識の活用・創造	○													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	配布資料による予習の実施（1.5時間×15回）													
	事後学修	課題への取り組み、配布資料による講義内容の復習（1.5時間×15回）													
	想定時間合計	45													
教科書	なし 適宜資料を配付する														
参考書	標準整形外科学（第16版）井樋栄二他 医学書院 2022 ISBN 9784260047821														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	課題レポート		30%	○	○	○							
	報告会での発表内容		50%	○	○	○							
	積極的な授業参加		20%	○	○	○							
注意事項	提示資料の取り扱いに注意すること 一部対面（集中講義形式）で実施する場合あり												
備考	なし												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	医師、理学療法士												
実務経験を いかした教育内容	実際の症例、研究等を提示しながら、講義を進める												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式						
HH42M003		病態医科学特論 (Advanced course of pathology and medicine)					医療関連科目群		オンライン（同時双方向型）						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態					
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	前期	水6	日本語				オムニバス					
担当教員	氏名 松浦恵子、下田恵、泥谷直樹、駄阿勉、 小林隆志、石崎敏理、高橋尚彦、緒方正男、 伊東弘樹、上村尚人、今井浩光、糸慎一郎、伊波英克、後藤 孔郎														
	E-mail fukusigakumu@oita-u.ac.jp 内線 6120														
授業の概要	主要な疾患の理解には、その病因、病態を深く学ぶことが不可欠である。基礎医学の知識を基にした各種疾患における病理学、病理組織学を学ぶとともに、炎症、腫瘍、循環等の病態生理学への理解を深める。また病態治療に用いるために不可欠な薬理学のメカニズムを身につけ、疾患への深い理解へ結びつけることを目的とする。														
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	
目標1	各疾患における病理学、病理組織学の説明が出来る。							○	○						
目標2	炎症、腫瘍、循環等の病態生理学を説明できる。							○	○						
目標3	治療に用いるために必要な薬理のメカニズムを説明できる。							○	○						
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度（計10）								5	5						
授業の内容															
1 医学生物学特論 分子生物学と病理学の関連を理解する。(松浦)															
2 病理学特論 病態生理総論を学ぶ。(泥谷)															
3 生物化学特論 病態理解に必要な生物化学の高度な知識、医薬品開発について学ぶ。（下田）															
4 病態生理学特論 不整脈におけるチャネル機能の変化について学ぶ。（糸）															
5 免疫学特論 免疫の理解に基づいた感染症疾患の病態を理解する。(小林)															
6 微生物学特論 感染症における免疫反応について理解する。(伊波)															
7 病理組織学特論① 消化器癌を中心として病理組織診断について学ぶ。(後藤)															
8 病理組織学特論② 腫瘍細胞の発生機序、癌遺伝子について深く学ぶ。(後藤)															
9 病理学特論 軟部腫瘍についてその病理組織診断を学ぶ。(駄阿)															
10 薬理学特論 薬理学全般特に分子標的治療薬の特性について理解する。(石崎)															
11 臨床腫瘍学特論 がんに対する化学療法について学ぶ。(緒方)															
12 薬物動態学特論 各種薬剤の体内動態の特性について学ぶ。（伊東）															
13 臨床薬理学特論 薬物動態、臨床反応への遺伝子多型の解析について学ぶ。（上村）															
14 医療倫理学特論 薬物療法により新たな病態を形成するジレンマの典型として薬害について学ぶ。（今井）															
15 循環器系病態学特論 不整脈などに関する電気生理学・病態学を学ぶ。(高橋)															
ラーニングゴール	A:知識の定着・確認		○	各分野において自ら症例の検討。最新の文献を調べる等により、研究に向けた基礎知識に関する考察力を身につける。				工夫その他の	少人数による座学と具体的な疾患、症例などに基づいた自己学習を行う。						
	B:意見の表現・交換		○												
	C:応用志向		○												
	D:知識の活用・創造		○												
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		与えられた課題について最新の文献等の検索を行い、資料を集め、まとめる。 (1時間×15回)												
	事後学修		与えられた課題について、 課題への取り組み、配布資料を使つての講義内容の復習（2時間×15回）												
	想定時間合計		45												
教科書	なし														
参考書	病理学 第6版 遠城寺宗知監修 医学書院 1995年出版 (ISBN9784260103510)														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への積極的な参加		50%	○	○	○							
	課題レポート		50%	○	○	○							
注意事項	なし												
備考	講義に関する質問は各講師に問い合わせること。その他の問い合わせは福祉健康科学部学務係（fukusigakumu@oita-u.ac.jp）に行うこと。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	医師、大学教員としてそれぞれ幅広い専門領域にわたる診療・研究実績を有す。												
実務経験を いかした教育内容	診療研究経験に基づいた生きた症例検討、病態理論の学修を行う。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42M006		神経系機能病態解析学特論 (Advanced lectures on pathological analyses of nervous system)					医療関連科目群		オンライン(同時双方向型、オンデマンド)					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	水6	日本語				オムニバス				
担当教員	氏名 花田礼子、寺尾岳、藤木稔、菅田陽怜、萬井太規													
	E-mail hsugata@oita-u.ac.jp 内線 7671													
授業の概要	運動や感覚、コミュニケーションや記憶・学習など、脳・神経系がいかにして各機能を制御し、適応的な行動を生み出しているのかを理解するとともに、それらの病態を知るための解析手法を身につける。													
具体的な到達目標														
DP等の対応(別表参照)								1	2	3	4	5	6	7
目標1 種々の行動を発現する脳・神経系のメカニズムについて説明できる。								○						
目標2 神経病態の解析手法や最新の研究知見について説明できる。								○	○					
目標3														
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								6	4					
授業の内容														
1 神経生理学の基礎(花田礼)														
2 神経の分子メカニズム(花田礼)														
3 分子神経科学最前線「神経科学分野の新規生理機能解析Ⅰ」(花田礼)														
4 分子神経科学最前線「神経科学分野の新規生理機能解析Ⅱ」(花田礼)														
5 機能的な精神病の基礎(河野)														
6 機能的な精神病の病態(平川)														
7 機能的な精神病の最新治療Ⅰ(平川)														
8 機能的な精神病の最新治療Ⅱ(室長)														
9 脳虚血・神経外傷の基礎(藤木)														
10 脳虚血・神経外傷の病態(藤木)														
11 脳虚血・神経外傷解析の最前線「中枢神経腫瘍の病態解析学Ⅰ」(藤木)														
12 脳虚血・神経外傷解析の最前線「中枢神経腫瘍の病態解析学Ⅱ」(藤木)														
13 神経科学を基盤とした理学療法の検証と開発(菅田)														
14 神経科学を基盤とした理学療法の最前線「運動学習」(菅田)														
15 神経科学を基盤とした姿勢制御解析の基礎と応用(萬井)														
ラーニング目標	A:知識の定着・確認	☐	演習や実技を踏まえた知識の習得				工夫その他の	神経機能について、ミクロレベルからマクロレベルまで広く理解するために、それぞれの専門分野に属する教員が、基礎から最新の知見を踏まえた幅広い内容の講義を展開する。						
	B:意見の表現・交換	☐	グループワーク・ペアでの協同作業等											
	C:応用志向	☐												
	D:知識の活用・創造	☐												
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	関連論文を読み、神経科学研究についての理解を深める(15時間)。												
	事後学修	関連論文を読み、神経科学研究についての理解を深める(15時間)。 配布資料を用いて復習する(15時間)												
	想定時間合計	45												
教科書	教科書を指定しない													
参考書	参考書を指定しない													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への積極的な参加		50%	○	○								
	レポート		50%	○	○								
注意事項	なし												
備考	なし												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の実務 経験	医師、理学療法士												
実務経験を いかした教育内容	医師、理学療法士としての実務経験をもつ教員が、臨床・研究・教育経験を生かし、神経系機能病態解析学特論について教育する。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42W001		福祉社会科学課題演習 (Problem Based Learning for Science of Welfare Society)					福祉関連科目群		オンライン(同時双方向型)					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択	2	1	福祉健康科学研究科	前期	水6	日本語		英語		単独				
担当教員	氏名 志賀信夫													
	E-mail nobu-shiga@oita-u.ac.jp 内線 7727													
授業の概要	日本の社会構造の変化に伴い、医療や生活支援が多様化・複雑化している。そのような「福祉」「医療」「心理」における課題を総合的に俯瞰し、ミクロ・メゾ・マクロのレベルから適切に課題を捉え、科学的に分析する能力と課題解決能力を得ることを目的とする。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	1つの課題を「福祉」「医療」「心理」の領域の視点から総合的に捉え説明することができる。							○	○					
目標2	1つの課題をミクロ、メゾ、マクロのレベルから捉え説明することができる。							○	○					
目標3	1つの課題を総合的・科学的に分析し、具体的・実際的な問題解決方法を提案することができる。							○	○					
目標4	自ら見いだした問題点を解決するための資料を収集・分析し、自分の考えをまとめて伝えることができる。							○	○					
目標5	社会科学の方法について理解する。							○	○					
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								5	5					
授業の内容														
1	オリエンテーション(科学的な分析と課題解決能力についての解説)(講義の進め方)													
2	総合的に福祉と健康科学を俯瞰する学術領域とは													
3	事例提示(課題抽出・学習課題抽出)													
4	事例提示(課題抽出・学習課題抽出)													
5	ミクロレベルの課題検討(グループ討議)													
6	ミクロレベルの課題検討(発表)													
7	ミクロレベルの課題(講義)													
8	メゾレベルの課題検討(グループ討議)													
9	メゾレベルの課題検討(発表)													
10	メゾレベルの課題(講義)													
11	マクロレベルの課題検討(グループ討議)													
12	マクロレベルの課題検討(発表)													
13	マクロレベルの課題(講義)													
14	総括(発表)													
15	総括(発表)													
ラーニング目標	A:知識の定着・確認	○	時間外学修、ディスカッションによる専門的知識の修得					工夫その他の	本科目は、課題に対し受講生自ら問題点を見だし、討議を重ね解決していくPBL(Problem Based Learning)方式にて行う。					
	B:意見の表現・交換	○												
	C:応用志向	○												
	D:知識の活用・創造	○												
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	課題抽出の際に、学習するべき課題を履修生間で決定する。当該学習課題について、各自が事前学修を行いグループ討議に備える。(15h)												
	事後学修	グループで抽出した課題について、グループ討議ができるように、当日の振り返りと自己学習を行う。(30h)												
	想定時間合計	45												
教科書	特に使用しない													
参考書	適宜紹介する													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	学習課題を的確に把握し、適切な情報源から学習を行った。		20%	○									
	討論に積極的に参加し、他の履修生の意見に注目し敬意を払って活動した。		20%	○									
	情報を批判的に検討し、データを批判的に統合・分析した。		20%	○									
	建設的なフィードバックを行い、グループの学修を促進した。		20%	○									
	諸課題をマクロ・メゾ・ミクロでとらえることができた。		20%	○									
注意事項	特になし												
備考	特になし												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の実務 経験	NPO法人を設立（生活困窮者支援）【志賀】。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42W002		社会福祉原理論 (Principles and Philosophy of Social Policy and Social Work)					福祉関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択	2	1	福祉健康科学 研究科	前期	水6	日本語				単独				
担当教員	氏名 滝口 真													
	E-mail makoto-takiguchi@oita-u.ac.jp 内線 6096													
授業の概要	この講義は、地域共生社会を実現する上での課題を念頭に置きつつ、現状における社会福祉の原理と実際を把握することを目的として展開している。そのことを通じて、地域共生社会のイメージを明確にするとともに、社会福祉のミクロレベル、メゾレベル、マクロレベルの課題を理解し、自分なりに説明できることをねらいとしている。特に高齢者、障がい者、児童といった対象別の理解を踏まえた上で、包括的な支援の必要性を理解することを目指す。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	社会福祉の支援についての研究的視点や方法について理解し説明することができる。							○	○					
目標2	地域の社会福祉問題の多様性と共通点を理解し説明できるようになる。							○	○					
目標3	社会福祉の諸制度を理解し、その課題について研究的な観点から説明できるようになる。							○	○					
目標4	ミクロレベル、メゾレベル、マクロレベルからエビデンスに基づいた包括的な支援のあり方について理解し説明できる。							○	○					
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								5	5					
授業の内容														
1	イントロダクション(社会福祉の理念、歴史、制度と法体系、学説等の観点から体系的に学ぶことについての概説)													
2	社会福祉の定義① 社会的排除と社会的包摂													
3	社会福祉の定義② 共生の理念と社会福祉													
4	日本の社会福祉の歴史													
5	海外の社会福祉の歴史													
6	社会福祉の理論(1) 社会政策と社会福祉の関連													
7	社会福祉の理論(2) 個人の主体性と社会福祉、特に岡村理論に注目して													
8	社会福祉の理論(3) 社会福祉とそれを向上させる運動、一番ヶ瀬理論、真田理論、高田理論に注目して													
9	社会福祉の理論(4) 社会福祉の運営をめぐる理論、特に三浦理論の意義に注目して													
10	共生社会を実現する上での諸問題(1):マイノリティと社会福祉													
11	共生社会を実現する上での諸問題(2):制度の狭間をどう考えるか													
12	共生社会を実現する上での諸課題(3):スティグマと社会福祉													
13	共生社会を実現する上での諸課題(4):社会福祉と地域格差													
14	社会福祉と諸条約													
15	今後の社会福祉の展望													
チェック項目	A:知識の定着・確認	☐	毎回の授業の最後の数分間において、授業内容を振り返りまとめと感想を記録。グループワークでの共同作業。					工夫その他の	講義に関連する新聞記事等を積極的に受講生同士が紹介し、受講生の意見を報告してもらう。					
	B:意見の表現・交換	☐												
	C:応用志向													
	D:知識の活用・創造													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	参考書や配付資料、社会福祉に関する新聞記事等をもとに予習する(15時間)。												
	事後学修	参考書や配付資料、社会福祉に関する新聞記事等をもとに復習する(15時間)。レポート等の課題に取り組む(15時間)。												
	想定時間合計	45												
教科書	阿部志郎、『福祉の哲学』(改訂版)誠信書房、2008年、改訂版、ISBN978-4-414-60329-3(指定) 渡辺和子、『置かれた場所で咲きなさい』、幻冬社、2012年、ISBN978-4-344-02174-7(指定)													
参考書	岡村重夫、『社会福祉原論』、全国社会福祉協議会、1983年。 高田眞治、『社会福祉内発的発展論』、ミネルヴァ書房、2003年。 平岡公一、杉野昭博、所道彦、鎮目真人、『社会福祉学』、有斐閣、2011年。 久田剛夫、『社会福祉の研究入門』、中央法規出版、2003年。その他適宜講義中に紹介する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への積極的な参加		20%	○	○	○	○						
	レポート課題		30%	○	○	○	○						
	最終レポート		50%	○	○	○	○						
			合計得点60点以上を単位取得の条件とする。										
注意事項	特になし												
備考	授業の内容等は進行状況に応じて若干の変更があります。												
リンク													
	URL												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式					
HH42W007		障害者福祉特論 (Social policy and social work for people with disabilities)					福祉関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択	2	2	福祉健康科学研究科	後期	水6	日本語				単独				
担当教員	氏名 滝口 真 E-mail makoto-takiguchi@oita-u.ac.jp 内線 6096													
授業の概要	変化が速い近年の障がい者福祉について政策、地域、支援のそれぞれの観点から課題を見出し、その課題の解決についていかなる方策があり得るかを議論する。受講者ひとりひとりが障がい者福祉の課題を能動的に見出し、自分なりの見解をもてるようになることをねらいとする。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	日本の障がい者政策に障がい者の権利条約が与えた影響とその課題について説明することができる。							○	○					
目標2	精神障がい者、知的障がい者の脱施設の課題について現状と課題を説明することができる。							○	○					
目標3	障がいの特性に合わせた支援方法について自分なりの意見を発表できる。							○	○					
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度 (計10)								5	5					
授業の内容														
1 障がい者福祉政策の歴史的展開 (1) ―国際障害者年以前の展開―														
2 障がい者福祉政策の歴史的展開 (2) ―障害者自立支援法以前の展開―														
3 障がい者福祉政策の歴史的展開 (3) ―障害者自立支援法以降の展開―														
4 障がい者福祉の理念														
5 障がい者と地域 (1) ―精神障がい者の脱施設―														
6 障がい者と地域 (2) ―知的障がい者の脱施設―														
7 障がい者と地域 (3) ―地域コンフリクト―														
8 障がい者に対する支援 (1) 発達障がい者に対する支援														
9 障がい者に対する支援 (2) 高次脳機能障がい者に対する支援														
10 障がい者に対する支援 (3) パーソナリティ障がい者に対する支援														
11 障がい者福祉の課題 (1) ―ユニバーサルデザインと障害―														
12 障がい者福祉の課題 (2) ―合理的配慮の浸透―														
13 障がい者福祉の課題 (3) ―雇用促進のための施策―														
14 障がい者福祉の課題 (4) ―共生型サービスの推進―														
15 障がい者福祉のこれから														
ラ イ ク ニ ン グ	A:知識の定着・確認		○能動的な調べ学習やグループ・ディスカッションを通じて、学生の動機		工 そ の 他 の		能動的な調べ学習やグループ・ディスカッションを通じて、学生の動機づけを高め、深い学びに導く。							
	B:意見の表現・交換		○講義の最後に質問を場を設け、回答する。時間的制約の場合は、次回の				講義の最後に質問を場を設け、回答する。時間的制約の場合は、							
	C:応用志向						講義で質問について回答する。							
	D:知識の活用・創造													
授業時間外 学修の内容 と想定時間	準備学修		参考書や配付資料をもとに予習する(10時間)。大学図書館等で福祉新聞を定期的に関覧する(10時間)。											
	事後学修		参考書や配付資料、社会福祉に関する新聞記事等をもとに復習する(10時間)。レポート等の課題に取り組む(15時間)。											
	想定時間合計		45											
教科書	教科書は使用しない予定である。毎回の講義で資料を配布する。													
参考書	滝口 真・福永良逸編著、『障害者福祉論』。法律文化社。2010年。ISBN978-4-589-03155-6 その他、講義の中で適宜紹介する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	講義における発言などの参加度		20%	○	○								
	講義でのレポート作成と発表		30%	○	○								
	期末レポート		50%	○	○								
合計得点60点以上を単位取得の条件とする。													
注意事項	積極的に議論に参加すること												
備考	授業の内容等は進行状況に応じて若干の変更がありうる。												
リンク													
	URL												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH42P019		臨床心理展開実習(心理実践実習A) (Expansive Training in Clinical Psychology(Practical Training in Psychology A))					心理関連科目群		対面						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態					
選択	2	1	福祉健康科学 研究科	通年	木1	日本語		英語		複数(共同)					
担当教員	氏名 渡邊亘、溝口剛、河野伸子、池永恵美、渡邊晴美、志方亮介、古長紗恵、増田成美、佐藤百合子、武内珠美、岐部薫、西村薫 E-mail n-kawano@oita-u.ac.jp 内線 7612														
授業の概要	心理教育相談室(学内実習施設)における支援活動に参画し、心理専門職の基本的姿勢、支援のプロセス(開始から終結まで)、支援の運営やマネジメント、状況の理解とそれに基づきとるべき対応、関係者との協力・連携といった支援業務の基礎を学ぶ。また、観察学習(経験者の面接への陪席等)に加え、心理教育相談室のクライアントに対する試行的な援助実践等を行うことで、具体的で実践的な技能を習得する。														
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7
目標1 心理教育相談室における援助のシステム・ルール・流れ等を把握し、相談の運営を理解することができる。									○						
目標2 要支援者への対応に関する基礎技能(電話対応、見立て、マネジメント、連携等)を体得する。									○						
目標3 心理職になる上での自己の課題に気づき、その深化あるいは修正を進める。									○						
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)									10						
授業の内容															
1 オリエンテーション(心理支援のシステム、ルール、倫理と法的義務)															
2 心理教育相談室での活動(電話対応)															
3 心理教育相談室での活動(相談受付・聴き取り)															
4 心理教育相談室での活動(問題の見立て)															
5 心理教育相談室での活動(支援計画の策定)															
6 心理教育相談室での活動(チームアプローチと連携)															
7 心理教育相談室での活動(危機対応)															
8 心理教育相談室での活動(環境と構造の整備)															
9 試行的な援助実践(検査)															
10 試行的な援助実践(面接や遊戯療法)															
11 スーパービジョン															
12 カンファレンスへの参加(事例発表)															
13 カンファレンスへの参加(事例検討)															
14 事例検討会															
15 経験者の面接への陪席と指導															
ラ イ ク ニ ン グ	A:知識の定着・確認		心理教育相談室(学内実習施設)における支援活動に参画し、観察学習(経験者の面接への陪席等)に加え、心理教育相談室のクライアントに対する試行的な援助実践等を行うことで、具体的で実践的な技能を習得する。						工 夫 そ の 他 の	「履修ガイド」や学習支援システム(moodle)を積極的に活用し、学習の成果と課題を明確にしつつ、系統的に学びを積み上げていくことを助ける。					
	B:意見の表現・交換														
	C:応用志向														
	D:知識の活用・創造														
授業時間外 学修の内容 と想定時間	準備学修		「授業の内容」に関する課題を課す。電話当番前におけるロールプレイ、相談室の機能についての事前学習、ケースの問題の見立てや支援計画に関連した調べ学習、使用する可能性のある心理検査の修得。実際にケースを担当してからは、ケースに応じた調べ学修と支援計画の策定。15h												
	事後学修		「授業の内容」に関する課題を課す。ケースカンファレンスや電話当番で接した事例について、見立てや支援方針に関わる調べ学修を行う。実際にケースを担当するようになってからは、ケース記録の作成、心理検査報告書、スーパーヴィジョンの実施。30h												
	想定時間合計		45												
教科書		「心理臨床家の手引き〔第4版〕」 鍾幹八郎ほか 誠信書房 2019年(ISBN:9784414416435)													
参考書		実習において指示する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	上記の内容に関する取り組み	50%	○	○	○							
	最終試験（レポート25%、口述試験25%）	50%	○	○	○							
注意事項	本実習の受講は、臨床心理学コースの大学院生に限る。 公認心理師受験資格取得のために、本科目を含む所定の科目で、心理実践実習の時間は計450時間以上、実習において担当ケース(心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等)に関する実習時間は計270時間以上必要である。											
備考	この科目は臨床心理士及び公認心理師受験資格取得のための必修科目である。											
リンク												
	URL											
担当教員の 実務経験の有無	○											
教員の 実務経験	公認心理師、臨床心理士											
実務経験を いかした教育内容	心理教育相談室のクライアントに対する具体的で実践的な支援を通じて大学院生教育を行う。											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式					
HH42P023		臨床心理実習B (Practical Training in Clinical Psychology B)					心理関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択	2	2	大学院福祉健康科学研究科	通年	木2	日本語	英語	複数(共同)						
担当教員	氏名 渡邊遼、溝口剛、河野伸子、池永恵美、渡邊晴美、志方亮介、古長紗恵、増田成美													
	E-mail m-ikenaga@oita-u.ac.jp 内線 6107													
授業の概要	心理教育相談室(学内実習施設)において具体的な心理支援の実践を学ぶ。特に、「臨床心理実習A」で行った心理支援や検査について、スーパービジョンやカンファレンスなど、多様かつ綿密な指導を受け、心理学的理解や支援の実践に関してより適切で高度なスキルを身につける。また、自らの課題を発見し、その解決に向けて取り組みを重ねる。													
具体的な到達目標														
目標1	心理支援や検査の実施について、より高度で実践的な内容を身につけ、実践できる。							1	2	3	4	5	6	7
目標2	対象者の状態や問題の性質、置かれた環境の特徴などを総合的に検討し、真に必要な心理支援について考えることができる。							1	2					
目標3	自らの課題に気づき、その解決に向けて取り組むことができる。							1	2					
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度 (計10)								5	5					
授業の内容														
1	オリエンテーション (指導の意味とシステム)													
2	アセスメント・見立てに関する指導 1 (電話対応)													
3	アセスメント・見立てに関する指導 2 (面接)													
4	アセスメント・見立てに関する指導 3 (心理検査)													
5	心理面接に関する指導 1 (導入・初期)													
6	心理面接に関する指導 2 (展開・中期)													
7	心理面接に関する指導 3 (終結・後期)													
8	心理面接に関する指導 4 (助言、指導、ガイダンス)													
9	チームアプローチに関する指導													
10	他職種連携・地域連携に関する指導													
11	事例検討 1 (事例発表)													
12	事例検討 2 (事例検討)													
13	経験者による支援実践への陪席													
14	自らの課題に気づく													
15	まとめ (省察及び成果と課題の明確化)													
ラーニングゴール	A:知識の定着・確認	○	口頭試問、体験活動、陪席、学生の過去の体験との紐づけ、調べ学修 (文献、インターネット)、Moodleの活用、発表、ディスカッション、相互教授、学びの省察、共同執筆、ロールプレイ、事例研究、心理教育相談室での実習					工夫その他の	「履修ガイド」や学習支援システム (moodle) を積極的に活用し、学習の成果と課題を明確にしつつ、系統的に学びを積み上げていくことを助ける。					
	B:意見の表現・交換	○												
	C:応用志向	○												
	D:知識の活用・創造	○												
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	担当ケースの問題の見立てや支援方略の策定に関連した調べ学修。先調べ学修及び担当ケースの状態等に基づく、問題の見立てや支援方略の策定。使用する可能性のある心理検査の実施法の修得。その他、実習において指示する。15h												
	事後学修	各セッションにおけるケース記録。心理検査。30h												
	想定時間合計	45												
教科書	「新版 心理臨床家の手引き」 鍾幹八郎ほか 誠信書房 (2000) (ISBN : 9784414416435)													
参考書	実習において指示する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	上記内容への取り組み		50%	○	○	○							
	最終試験（レポート25%、口述試験25%）		50%	○	○	○							
注意事項	受講は臨床心理学コースの大学院生で、臨床心理士受験資格取得のための必修科目（一年次開講のもの）の全ての単位を取得した者に限る。												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得のための必修科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の実務 経験	公認心理師、臨床心理士												
教員以外で 指導に関わる 実務経験者の有無	○												
教員以外の 指導に関わる 実務経験者	公認心理師、臨床心理士												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42P002		臨床心理学研究法特論 (Special Seminar on Methodology of Clinical Psychology)					心理関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	木3	日本語	英語	オムニバス						
担当教員	氏名 渡辺 亘・溝口 剛・古長紗恵													
	E-mail wwata@oita-u.ac.jp(渡辺)・t-mizo@oita-u.ac.jp(溝口) 内線 7585(渡辺)・7522(溝口)													
授業の概要	臨床心理学およびその関連領域における代表的な研究方法について学ぶ。特に、質的研究を中心としつつ、質的研究と量的研究を組み合わせた手法についても取り上げる。また、最近の臨床心理学研究の動向を踏まえ、適切な研究テーマの選択、研究テーマにもとづいた問題の設定、適切な研究方法の選択、研究計画の立案についても具体的に考える。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 臨床心理学的研究および質的研究の視点を理解し、説明できる。								○	○					
目標2 代表的な臨床心理学的研究の手法について、その意義と実施法を理解し説明できる									○					
目標3 文献や先行研究の検索・選択・整理、研究論文の書き方について理解し説明できる									○					
目標4 学位論文に向けて基本的な構想をまとめることができる。									○					
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								3	7					
授業の内容														
1 臨床心理学研究の概説														
2 面接調査法														
3 KJ法														
4 複線径路・等至性モデルTEM														
5 GTAとM-GTA														
6 臨床科学の方法論														
7 質的研究と心理療法の再構成														
8 テクスト解釈学と社会構築主義														
9 現象学的アプローチ														
10 質的研究法の中核としてのテクスト解釈学と現象学														
11 事例研究法の方法論的位置づけ														
12 事例研究法の進め方														
13 事例研究論文の書き方														
14 事例研究論文に関する討議														
15 学位論文の研究計画について														
チェックポイント	A:知識の定着・確認	○	臨床心理学研究法に関する調べ学習(文献の収集と分析)、プレゼンテーション、ディスカッション等を行い、各自の修士論文や事例研究の執筆につなげていく。					工夫その他の	論文の収集と分析、討議を行う。特に、論文に対して、批判的に読む力をつけていく。					
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	「授業の内容」に関する課題を課す(論文の収集、分析、プレゼンテーションの準備など)。詳細は授業において指示する。20h												
	事後学修	「授業の内容」に関する課題を課す(ディスカッションをふまえて、さらに文献抄読を進め、各自の修士論文や事例研究の執筆につなげる、など)。詳細は授業において指示する。25h												
	想定時間合計	45												
教科書	なし。資料は授業中に配付する。													
参考書	「臨床心理学研究の技法」 下山晴彦 福村出版 2000年 ISBN 978-4571205859 「臨床実践のための質的研究法入門」 ジョン・マクレオッド(著)金剛出版 2007年 ISBN 978-4772409575 「質的研究法マッピング」 サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実(編)新曜社 2019年 ISBN 978-4788516472													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への積極的参加		50%	○	○	○	○						
	レポート		50%	○	○	○							
注意事項	なし。												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得のためのA群科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	臨床心理士、公認心理師												
実務経験を いかした教育内容	臨床心理学的支援を踏まえた研究の進め方についてとりあげる。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH41Z003		地域医療健康増進科学特論 (Advanced lectures on sciences on community medicine and health promotion)							オンライン（同時双方向型、オンデマンド）					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	木6	日本語		オムニバス						
担当教員	氏名 上田貴威、塩田星児、後藤孔郎、朝井政治													
	E-mail ma-asai@oita-u.ac.jp（朝井） 内線 7551（朝井）													
授業の概要	本科目のうち、地域医療の分野では、現在行われている地域医療についてがん患者の事例を中心に学修する。健康増進分野では事例や先行研究を通じて、健康増進に関する課題と問題解決の方法を学修する。以上を通して、地域医療や健康増進に関する研究を遂行するために必要な理論および実践的な方法論を身につける。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 具体例を通して、現在実施されている地域医療について説明できる。								○	○					
目標2 疾病予防・健康増進をすすめるためのポイントが説明できる。								○	○					
目標3 提示された情報の中から必要な情報を分析し、問題解決に必要な研究計画が立案できる。								○	○					
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度（計10）								5	5					
授業の内容														
1 地域医療・在宅医療の現状と未来（塩田）														
2 地域医療における総合診療能力（塩田）														
3 地域医療・健康増進に関する実装研究（塩田）														
4 地域医療にねざした内視鏡外科治療学（上田）														
5 健康増進へ向けた外科腫瘍学（上田）														
6 地域検診における疾病予防対策（後藤）														
7 在宅医療の諸課題（後藤）														
8 地域における診療学特論1（後藤）														
9 地域における診療学特論2（後藤）														
10 地域での介護予防事業に関する取り組みから学ぶ（情報提供）（朝井）														
11 地域での介護予防事業に関する取り組みから学ぶ（発表、総合討議）（朝井）														
12 地域での検診事業に関する取り組みから学ぶ（情報提供）（朝井）														
13 地域での検診事業に関する取り組みから学ぶ（発表、総合討議）（朝井）														
14 地域での健康増進事業の取り組みから学ぶ（情報提供）（朝井）														
15 地域での健康増進事業の取り組みから学ぶ（発表、総合討議）（朝井）														
ラーニング	A:知識の定着・確認		☐	各分野において自ら症例の検討、最新の文献を調べる等により、研究に				工夫その他の	事例を用いた実践的な講義の実施、少人数討論（ディベート）の実施					
	B:意見の表現・交換		☐	向けた基礎知識に関する考察力を身につける。										
	C:応用志向		☐											
	D:知識の活用・創造		☐											
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		配布資料を使つての予習の実施（1.5時間×15回）											
	事後学修		課題への取り組み、配布資料を使つての講義内容の復習（1.5時間×15回）											
	想定時間合計		45											
教科書	なし 資料を適宜配布する													
参考書	なし													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への積極的な参加		20%	○	○	○							
	課題レポート		40%	○	○	○							
	報告会での発表内容		40%	○	○	○							
注意事項	提示資料の取り扱いに注意すること												
備考	なし												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	医師、理学療法士として長年の診療経験がある												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH41Z004		地域福祉特論 (Special Seminar in Community Development)							オンライン（同時双方向型）					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	前期	木6	日本語		単独						
担当教員	氏名 齋藤 建児													
	E-mail k-saito@oita-u.ac.jp 内線 6117													
授業の概要	本科目では、地域共生社会の実現が求められる今日の地域福祉と関連する「実践」および「研究」の動向を踏まえ、次の構成で展開する。1 地域福祉の内容と構造（歴史、概念、理念）、2 地域社会の変化と地域生活課題、3 地域共生社会の実現に向けて求められる地域福祉実践の視点と方法、4 地域共生社会の実現に向けて求められる地域福祉の政策および関連制度、以上の4つの論点を地域福祉研究の視点に基づいた文献やデータ、事例から学ぶ。さらに、本科目では各回の報告、ディスカッションを通じて、今日的な地域福祉と関連する諸課題を分析し、能動的に検討できることをめざす。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	地域福祉の内容と構造（歴史、概念、理念）を理解、説明できる							○	○					
目標2	地域社会の変化と地域生活課題を把握し、起因する諸要因を分析できる							○	○					
目標3	地域共生社会の実現に向けて求められる地域福祉実践の視点と方法を生かして検討できる							○	○					
目標4	地域共生社会の実現に向けて求められる地域福祉の政策および関連制度を多面的に考察できる							○	○					
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度（計10）								5	5					
授業の内容														
1	ガイダンス（授業の概要、授業計画の説明）、日本の地域福祉の展開過程													
2	欧米における地域福祉の展開過程													
3	地域福祉の理論と思想													
4	地域福祉推進の方法:													
5	ボランティア活動の現在													
6	人口減少社会における地域福祉													
7	社会的孤立および複合化、複雑化する福祉課題													
8	地域共生社会の理念													
9	地域共生社会の実現に向けたソーシャルワークの実践方法													
10	地域共生社会の実現に向けた包括的な相談支援体制の構築													
11	地域共生社会の実現に向けた地域づくりのコーディネート													
12	地域共生社会の実現に向けた参加支援													
13	包括的支援体制構築に向けた制度間の協働													
14	地域共生社会の実現に向けた地域福祉計画と他計画													
15	地域共生社会の実現に向けた地域福祉実践および政策の展望													
チェック項目	A:知識の定着・確認	○	受講生はテーマに即した資料を元にレポートを作成し、授業時に報告、ディスカッションを通じて考えを深める。				工夫その他の	全国の先進事例に関する資料、データ、映像資料等を活用する。 。大分県内の事例、データ等を活用する。						
	B:意見の表現・交換	○												
	C:応用志向													
	D:知識の活用・創造	○												
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	各回、報告者を割り当てる。報告者は、あらかじめ配布した資料をもとにレジュメを作成し、授業で報告するとともに自らの見解を提示する。他の受講生も資料を精読し、自らの見解や疑問点を整理したうえでディスカッションを行う（15h）。新聞等を通じて時事問題を確認する（10h）												
	事後学修	授業の内容を振り返り、自らの研究や実践に活かせるよう検討を続ける（15h） 講義で得た問題意識に関連する文献の検索とレビューに努める（5h）												
	想定時間合計	45												
教科書	なし。資料は適宜配布する。													
参考書	平野隆之『地域福祉マネジメントー地域福祉と包括的支援体制ー』有斐閣、2020年、ISBN 978-4641174573 稲葉一洋『地域福祉の発展と構造』学分社、2007年、ISBN 9784762016240 上野谷加代子編著『共生社会創造におけるソーシャルワークの役割ー地域福祉実践の挑戦ー』ミネルヴァ書房、2020年、ISBN 9784623088676													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	ディスカッション等授業への参加態度		50%	○	○	○	○						
	レポート		50%	○	○	○	○						
注意事項	地域共生社会の実現に向けた諸制度の基礎知識を備えていなくとも、本科目の履修を通じて理解ならびに検討できるような学修計画である。												
備考	なし												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の実務 経験	地域福祉専門員として岩手県旧田川井村社会福祉協議会で勤務。地域包括支援センター社会福祉士として岩手県二戸市社会福祉協議会で勤務。												
実務経験を いかした教 育内容	地域福祉現場での実践の経験をもとに、いかにして地域の課題を実践と研究の両面から解決へつなげていけるかを本講義で説明する。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式						
HH42M004		病態治療学特論 (Advanced course of pathophysiology and therapeutics)					医療関連科目群		オンライン（同時双方向型、オンデマンド）						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態					
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	前期	木6	日本語				オムニバス					
担当教員	氏名 柴田洋孝、井原健二、 秦聡孝、河野康志、 北野敬明、河野憲司、平松和史、 加来信広、片岡晶志、後藤孔郎、渡辺 哲生、、水上 一弘、小副川 敦、横山 勝彦、安部 隆、 E-mail mkataoka@oita-u.ac.jp 内線 旦野原7457														
授業の概要	現在の医療においては、多くの愁訴、疾患を抱えた人々への理解が必要不可欠である。また各種病態の診断、治療は刻々と変化しており、病態の深い理解、最新の診断学、治療法を理解する必要がある。本科目では、幅広い疾患においてその発生機序、病態生理を学ぶことにより、より深い疾患の理解を得る。また、病態に基づいた最新の診断、治療法について具体的な症例を通して学ぶ。														
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	各種疾患の病態を説明できる。								○						
目標2	疾患の診断技術、治療法を説明できる。								○						
目標3	治療に用いる手技、薬剤の特徴を説明できる。								○						
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度 (計10)									10						
授業の内容															
1 病態治療学：リハビリテーション医学領域 (片岡)															
2 病態治療学：消化器領域 (水上)															
3 病態治療学：内分泌領域 (後藤)															
4 病態治療学：内分泌領域 (柴田)															
5 病態治療学：視機能領域 (横山)															
6 病態治療学：腎尿路生殖器領域 (秦)															
7 病態治療学：呼吸器領域 (小副川)															
8 病態治療学：頭頸部領域 (渡辺)															
9 病態治療学：整形外科領域 (加来)															
10 病態治療学：小児科学領域 (井原)															
11 病態治療学：生殖器領域 (河野康志)															
12 病態治療学：周術期管理医学領域 (北野)															
13 病態治療学：救命救急医学領域 (安部)															
14 病態治療学：歯科口腔外科領域 (河野憲司)															
15 病態治療学：医療安全管理領域 (平松)															
ラーニング アイコン イン グ	A:知識の定着・確認		☐	小人数の学生との相互議論・意見交換を行い、知識の確認・定着をおこなう。				☐	工夫 その 他の	講義で症例提示をおこなう					
	B:意見の表現・交換		☐												
	C:応用志向		☐												
	D:知識の活用・創造		☐												
授業時間外 学修の内容 と想定時間	準備学修		該当する講義の概論を学修。 15時間												
	事後学修		提示された症例に関する疾患の検討、文献検索、報告のまとめ。30時間												
	想定時間合計		45												
教科書	なし。教員からの配布資料あり														
参考書	なし（各教員からの指示）。														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	レポート		100%	○	○	○							
注意事項	提示された症例のデータ、画像などの情報管理に注意をすること。												
備考	なし												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	担当教員は、全て医師免許を持つ、各専門領域の専門医である。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH42M009		臨床実践演習 (Advanced practice on Medical Science)					医療関連科目群		オンライン（同時双方向型）						
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択		2	1	福祉健康科学研究科	後期	木6	日本語	英語	オムニバス						
担当教員	氏名 加来信広, 朝井政治, 阿南雅也, 菅田陽怜, 萬井太規, 大塚章太郎														
	E-mail 阿南:anan-masaya@oita-u.ac.jp 内線 阿南:6115														
授業の概要	本科目は、主として臨床での経験が浅い医療従事者を対象として、それぞれの職種に求められる基本的なクリニカルリーズニングとスキルについて代表的な症例を通して身につける。さらに医療・地域で関わる他職種との連携について学修することを目的とする。														
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 各専門職に求められる知識の説明と手技の実施ができる									○	○					
目標2 他職種との連携の必要性について説明し、実際に症例に対応できる									○	○					
目標3															
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度（計10）									6	4					
授業の内容															
1 運動器疾患の評価1（加来）															
2 運動器疾患の治療1（加来）															
3 運動器疾患の評価2（大塚）															
4 運動器疾患の治療2（大塚）															
5 内部障害を有する症例の評価1（朝井）															
6 内部障害を有する症例の治療1（朝井）															
7 内部障害を有する症例の評価2（朝井）															
8 内部障害を有する症例の治療2（朝井）															
9 神経疾患の評価1（菅田）															
10 神経疾患の治療1（菅田）															
11 神経疾患の評価2（萬井）															
12 神経疾患の治療2（萬井）															
13 虚弱高齢者への介入1（阿南）															
14 虚弱高齢者への介入2（阿南）															
15 虚弱高齢者への介入3（阿南）															
ラーニンググループ	A:知識の定着・確認		○	講義の中でグループディスカッションを適宜行う。			工夫その他の	実践を意識した体験的な学修を促す（病院や施設等での症例に対するハンズオンを含む）							
	B:意見の表現・交換		○												
	C:応用志向		○												
	D:知識の活用・創造		○												
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		事前に各種疾患の病態を理解しておく（15h）												
	事後学修		発表の準備等を行う（30h）												
	想定時間合計		45												
教科書		指定しない													
参考書		指定しない													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への積極的な参加	20%	○	○								
	課題レポート	40%	○	○								
	事例報告会での発表内容	40%	○	○								
注意事項	関連する医療・地域・教育施設等において体験的な学修に参加し、各担当教員から提示された課題を提出する必要がある											
備考	なし											
リンク												
	URL											
担当教員の 実務経験の有無	○											
教員の 実務経験	医師、理学療法士											
実務経験を いかした教 育内容	実際の事例、または各分野の特徴的な症例を通じて解説を実施する											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式						
HH42P006		健康心理学特論(心の健康教育に関する理論と実践) (Special Seminar in Health Psychology(Theory and Practice for Mental Health Education))					心理関連科目群		オンライン(同時双方向型)						
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択		2	1・2	福祉健康科学研究科	前期	木6	日本語		単独						
担当教員	氏名 中里 直樹														
	E-mail nakazato-naoki@oita-u.ac.jp 内線 7530														
授業の概要	心の健康問題と健康教育, Well-being, ストレスマネジメントなどについて, 健康心理学の今日的なトピックスも取り上げながら考える。心の健康の維持増進や, 健康教育, ストレスの軽減や対処能力などに関する理論と実際について講義し, 議論する。また, 講義中でとりあげる心理的健康のテーマに関して, 医療, 福祉, 心理の専門家がどのように協力して支援を展開していくことができるのかについても考える。講義とグループ発表, 討議などにより授業を進める。														
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 健康心理学の今日的な役割や課題, 心の健康教育と心理社会的ストレス, Well-beingに関する主な理論について説明できる。									○						
目標2 心の健康の維持増進やストレスマネジメント, Well-beingの実際について学び, 実践的知識とスキルを習得し, 表現できる。									○						
目標3 健康心理学の視点や方法論を自身の健康観の醸成や心身健康の維持増進にどのように役立てられるか, 述べることができる。									○						
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)									10						
授業の内容															
1		健康心理学の役割と課題													
2		現代社会における心の健康, Well-beingに関する課題													
3		ストレスと心身の健康及びコーピング													
4		ストレス, Well-beingとパーソナリティ													
5		心の健康, Well-beingと自尊心													
6		楽観性と希望													
7		ソーシャル・サポートと予防的コーピング													
8		ライフイベントによる心の健康, Well-beingへの影響													
9		外傷性ストレス, 喪失体験と心の健康													
10		自己注目と抑うつ, セルフコントロール技法													
11		レジリエンスと心の健康, バーンアウトの予防と対策													
12		社会環境によるWell-beingへの影響: 我が国における課題													
13		社会環境による健康行動への影響													
14		地域の特徴と人格による心の健康, Well-beingへの影響													
15		健康教育による予防効果													
ラーニング目標	A:知識の定着・確認		☐		健康心理学に関する能動的な調べ学習, 授業でのディスカッション, ライフイベント, プレゼンテーションを通じて, 学生の動機づけを高め, 深い学びに導く。					工夫その他の					
	B:意見の表現・交換		☐												
	C:応用志向														
	D:知識の活用・創造														
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		配布資料や参考文献等の情報を予習する(15h)												
	事後学修		授業で学習したことについての復習をし, 紹介された資料・文献について精読することで理解を深める(30h)												
	想定時間合計		45												
教科書		・教科書は指定しない。適宜, 資料を配布する。													
参考書		・Health Psychology (11th ed.) Taylor, S., & Stanton, A. L. (2020) McGraw-Hill Education, ISBN978-1260253900 ・Health Psychology: An Introduction to Behavior and Health (10th ed.) Brannon, L., Updegraff, J. A., & Feist, J. (2021) Cengage Learning, ISBN978-0357375006													

成績 評価 の 方法 及 び 評 価 割 合	評価方法		割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10
	授業内の活動への積極的な参加（討議，質問，ライティング課題）		30%	○	○	○							
	プレゼンテーション		30%	○	○	○							
	最終レポート		40%	○	○	○							
授業回数の3分の1を超えて欠席，もしくは発表時に特別の事由なく欠席した場合，最終レポートを受理しない。													
注意事項													
備考		この科目は臨床心理士受験資格取得に関するD群科目であり，公認心理師受験資格取得に関する必修科目である。											
リンク													
		URL											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH42W010		福祉心理学特論(福祉分野に関する理論と支援の展開) (Special Seminar on Clinical Psychology in Welfare(Support Theory and Practice for Welfare Support))					福祉関連科目群		対面						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態					
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	前期	金1	日本語				オムニバス					
担当教員	氏名 志方亮介 E-mail r-shikata@oita-u.ac.jp 内線 6169														
授業の概要	本科目では、福祉領域の心理臨床として、虐待、DV、障害者福祉、児童家庭福祉、高齢者福祉、地域福祉を概説しつつ、それぞれのテーマに関する心理学的支援の実態について取り上げる。また福祉領域に留まらず、医療や教育等の関係領域との連携や、他職種との協働についても積極的に学びを展開する。														
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	
目標1	福祉の現場における心理支援の知識や求められる技能について説明できる							○							
目標2	福祉の現場における心理支援に必要な、多職種協働のあり方などの知識を習得できる							○							
目標3	社会的養護に関する専門的な知識と支援技法を習得できる							○							
目標4	生涯発達の観点から福祉の諸問題への支援を論じることができる。							○							
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)								10							
授業の内容															
1 福祉心理学概説①：福祉心理学概説 オリエンテーション グループワークに向けて															
2 福祉心理学概説②：福祉分野の課題と要支援者の理解1 子育て支援															
3 福祉心理学概説③：福祉分野の課題と要支援者の理解 2 社会的養護(虐待・トラウマ)															
4 福祉心理学概説④：福祉分野の課題と要支援者の理解3 対人援助職とストレス															
5 福祉心理学概説⑤：法律と制度															
6 福祉心理学に関する諸問題の整理とディスカッション(グループ作業)															
7 グループ発表1 障害児者支援															
8 グループ発表2 虐待問題への支援															
9 グループ発表3 高齢者支援															
10 グループ発表4 ヤングケアラー支援															
11 グループ発表5 貧困問題への支援															
12 グループ発表6 精神疾患への支援															
13 グループ発表7 いじめ・誹謗中傷・ひきこもりへの支援															
14 グループ発表8 就労支援															
15 まとめ 他領域との横断的な支援に向けて															
チェックポイント	A:知識の定着・確認		テーマに関する文献研究、プレゼンテーション、				工夫その他の	能動的な調べ学習や発表後のディスカッションを通じて、学生の動機づけを高め、深い学びに導く。							
	B:意見の表現・交換	○	グループディスカッション、ロールプレイ等のワーク、												
	C:応用志向	○	ミニッツペーパー												
	D:知識の活用・創造	○													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	グループ発表の資料作成(20h) 教科書・参考資料・インターネット等を用いた予習(10h)													
	事後学修	振り返りミニレポートへの取り組み(5h) 最終レポートへの取り組み(10h)													
	想定時間合計	45													
教科書	適宜資料を配布する 資料をMoodle上に掲載する場合には事前に告知する。														
参考書	下山晴彦 佐藤隆夫 本郷一夫 監修 渡部純夫 本郷一夫 編 公認心理師スタンダードテキストシリーズ17 福祉心理学 ミネルヴァ書房 2021年 2,400円+税ISBN 9784623086276 その他授業内で適宜紹介する。														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	ミニッツペーパー		30%	○	○	○	○						
	最終レポート		35%	○	○	○	○						
	グループ発表の取り組み		35%	○	○	○	○						
ディスカッションには積極的に議論に参加し、自分の意見を述べること。													
注意事項	グループ発表に積極的に取り組むこと。												
備考	この科目は公認心理師受験資格取得に関する必修科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	公認心理師・臨床心理士。発達相談機関における障害児者支援や、精神科領域における高齢者支援等の経験あり。												
実務経験を いかした教育内容	当事者支援に加え、保護者や家族への支援を視野に入れた事例検討を行い、包括的支援への知識を習得する。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH42P005		臨床発達心理学特論 (Special Seminar on Clinical Developmental Psychology)					心理関連科目群		対面						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語		担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	前期	金2	日本語			単独						
担当教員	氏名 河野伸子														
	E-mail n-kawano@oita-u.ac.jp 内線 7612														
授業の概要	人のこころの発達、身体的発達、認知的発達、社会的発達などが相互に関連しながら、周囲とのかかわりの中で変化していく過程であり、様々な視点から発達理論が構築されている。臨床心理学的な諸問題に関して、発達過程という観点から見直すことは、周囲との関係性の中で個人のこころのあり様がどのように形成され、現在の問題につながっているのかを理解することにつながる。この授業では、人のこころの発達と精神病理について、理論家がどのように理論を構築してきたのか、そして、実際の事例の中で、それらの理論がどのように臨床心理学的理解と支援につながっているかを学ぶ。														
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	
目標1	さまざまな発達の理論について学び、説明することができる。							○							
目標2	臨床心理学的な諸問題に対して、発達過程という観点から、支援の方向性について具体的に考察し、説明することができる。							○							
目標3															
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)								10							
授業の内容															
1 発達心理の基礎理論とその発展(Piaget、Vygotsky、Erikson、Freudなど)															
2 Bowlbyの理論															
3 Bowlbyの理論を使った事例理解															
4 Mahlerの理論															
5 Mahlerの理論を使った事例理解															
6 Kleinの理論															
7 Kleinの理論を使った事例理解															
8 Winnicottの理論															
9 Winnicottの理論を使った事例理解															
10 KernbergおよびMastersonの理論															
11 KernbergおよびMastersonの理論を使った事例理解															
12 Kohutの理論															
13 Kohutの理論を使った事例理解															
14 SternおよびFonagyの理論															
15 SternおよびFonagyの理論を使った事例理解															
ラーニングポイント	A:知識の定着・確認		○	調べ学修を課す			工夫その他の	レポートおよび発表を課す中で省察や調べ学習を促す。また、事例を提示することにより、具体的な学びを促す。							
	B:意見の表現・交換		○												
	C:応用志向														
	D:知識の活用・創造														
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		次の時間に学習する内容や資料について、あらかじめ精読してくる。発表の際には、文献を読み込み、該当する理論を事例理解に用いている文献を探して提示する。(15h)												
	事後学修		講義で扱った理論について、参考文献等を精読する。(30h)												
	想定時間合計		45												
教科書	適宜授業時間中に提示するが、基本的には、各理論家の著書、翻訳本、その理論を使った事例論文などを各自で探す。														
参考書	適宜授業時間中に提示する。														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業内の討議や活動への積極的参加		50%	○	○								
	最終レポート		50%	○	○								
注意事項	なし。												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得に関するB群科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	公認心理師，臨床心理士												
実務経験を いかした教育内容	実践経験を活かした視点で事例への理解を教示する。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH41Z005		家族・コミュニティ心理学特論(家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践) (Special Seminar on Family, Group and Community Psychology(Support Theory and Practice for Family, Group and Community))							対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	金6	日本語				オムニバス				
担当教員	氏名 志方亮介 飯田法子													
	E-mail r-shikata@oita-u.ac.jp 内線 6169													
授業の概要	心理臨床の現場では、クライアントへの支援だけでなく「家族・集団・地域社会」を包括的に支援する視点が求められる。本授業では「家族関係・集団・地域社会」に関する心理臨床の知識を習得し、医療や福祉をはじめとする多職種との協働と総合的心理支援について実践的に学ぶ。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 「家族関係・集団・地域社会」への心理支援の知識を理解し説明できる								○						
目標2 「家族関係・集団・地域社会」への心理支援の技術を事例検討やロールプレイを通して身に付けることができる								○						
目標3 「家族関係・集団・地域社会」への心理支援に求められる態度を身に付けることができる								○						
目標4 「家族関係・集団・地域社会」の観点から臨床心理学的な支援を論じることができる								○						
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								10						
授業の内容														
1 オリエンテーション：授業の目標および内容														
2 家族・集団・地域における心理支援(1)：概論														
3 家族・集団・地域における心理支援(2)：家族療法とコミュニティアプローチ														
4 家族・集団・地域における心理支援(3)：システム論的心理支援														
5 家族・集団・地域における心理支援(4)：事例検討														
6 支援の技法等 受講生のテーマに基づいた発表1 子育て支援														
7 支援の技法等 受講生のテーマに基づいた発表2 社会的養護														
8 支援の技法等 受講生のテーマに基づいた発表3 いじめ・不登校支援														
9 支援の技法等 受講生のテーマに基づいた発表4 メンタルヘルス支援														
10 支援の技法等 受講生のテーマに基づいた発表5 障害児・者支援														
11 支援の技法等 受講生のテーマに基づいた発表6 災害支援														
12 支援の技法等 受講生のテーマに基づいた発表7 被害者支援														
13 支援の技法等 テーマに基づいた受講生の発表8 DV(家庭内暴力)														
14 支援の技法等 受講生のテーマに基づいた発表9 自殺														
15 支援の技法等 受講生のテーマに基づいた発表10 心理学的地域支援 とまとめ														
ラーニンググループ	A:知識の定着・確認		テーマに関する文献研究、プレゼンテーション、グループディスカッション、ロールプレイ等のワーク、ミニッツペーパー					工夫その他の	能動的な調べ学習やグループ・ディスカッションを通じて、学生の動機づけを高め、深い学びに導く。					
	B:意見の表現・交換													
	C:応用志向													
	D:知識の活用・創造													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		グループ調べ学習やディスカッション用の調べ学習を行う(20h) 配布資料やインターネット、参考文献等を用いて必要に応じて予習する(10h)											
	事後学修		毎回のミニッツペーパーおよびレポート課題に取り組む(15h)											
	想定時間合計		45											
教科書		適宜資料を配布する												
参考書		野島一彦 繁樹算男 監修 竹村和久 編 公認心理師の基礎と実践 11 社会・集団・家族心理学 遠見書房 2018年 2,600円+税 ISBN 978-4-86616-061-0 横谷謙継 図解 ケースで学ぶ家族療法 システムとナラティブの見立てと介入 遠見書房 2022年 2,700円+税 ISBN978-4-86616-155-6 その他授業内で適宜紹介する。												

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	グループ発表の取り組み		35%	○	○	○							
	最終レポート		35%	○	○	○							
	ミニッツペーパー		30%	○	○	○							
注意事項	グループ発表の準備やディスカッションに積極的に取り組むこと												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得に関するC群科目であり、公認心理師受験資格取得に関する必修科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	公認心理師・臨床心理士として発達相談機関における障害児者支援や保護者支援、大学学生相談における学生支援の経験あり。												
実務経験を いかした教育内容	発達障害、高齢者、その家族への対応など、心理職としての臨床経験を生かし、受講生には事例を通して実際の現場をイメージしやすい内容を教材として提示する												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式					
HH42M007		医療工学特論 (Advanced lecture on Biomedical engineering)					医療関連科目群		オンライン（同時双方向型、オンデマンド）					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	金6	日本語				オムニバス				
担当教員	氏名 穴井博文、猪股雅史、波多野豊、宮本伸二、 浅山良樹													
	E-mail 穴井博文anaiana@oita-u.ac.jp,猪股雅史inomata@oita-u.ac.jp,波多野豊hatano@oita-u.ac.jp,宮本伸二smiyamot@oita-u.ac.jp,浅山良樹 asayama@oita-u.ac.jp 内線 波多野豊(内線5880),穴井博文(内線5145),猪股雅史(内線5840),宮本伸二(内線6730),浅山良樹(内線5930)													
授業の概要	医療従事者として工学の専門的知識・技術を学び、医療と工学の連携による新しい技術の開発やそれによる地域医療の進歩について深く探究する。さらに、各分野における工学技術を取り入れた医療機器の治療・診断技術の特性、医工連携に関する開発研究について、導入事例を通して学ぶ。													
具体的な到達目標														
DP等の対応(別表参照)								1	2	3	4	5	6	7
目標1	内視鏡治療、創傷診断治療、外科循環制御、放射線診断における医工連携・産学官連携の現状を、理解し、論じることが出来る。							○	○					
目標2	医療機器の特性を理解し、説明することが出来る。							○	○					
目標3														
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								7	3					
授業の内容														
1 臨床医工学の基礎(穴井)														
2 医工連携・産学官連携(穴井)														
3 臨床医工学最前線「医工連携に関する開発研究」(穴井)														
4 内視鏡外科治療学の基礎(猪股)														
5 内視鏡外科治療で用いる機器の特性と問題点(猪股)														
6 内視鏡外科治療学最前線「医工連携に関する開発研究」(猪股)														
7 創傷診断治療学の基礎(波多野)														
8 創傷診断治療で用いる機器の特性と問題点(波多野)														
9 創傷診断治療学最前線「医工連携に関する開発研究」(波多野)														
10 外科循環制御学の基礎(宮本)														
11 外科循環制御学で用いる機器の特性と問題点(宮本)														
12 外科循環制御学最前線「医工連携に関する開発研究」(宮本)														
13 放射線診断学の基礎(浅山)														
14 放射線診断学で用いる機器の特性と問題点(浅山)														
15 放射線診断学最前線「医工連携に関する開発研究」(浅山)														
ラーニング チェック ポイント グループ	A:知識の定着・確認		○		修学指導教官、研究指導教官との双方向性の共同作業が主体となる。研究課題についてその問題点や解決方法を考察し、指導教官との討議を通じて発展させる。その過程でさらに問題点を抽出し克服策を考え実践する。				工夫 その他 の	小論文作成を通じて問題点の整理・論理的思考を高める。				
	B:意見の表現・交換		○											
	C:応用志向		○											
	D:知識の活用・創造		○											
授業時間外 学修の内容 と想定時間	準備学修		事前に配布した資料を使つての予習の実施(15時間)											
	事後学修		事前に配布した資料を使つての復習の実施(30時間)											
	想定時間合計		45											
教科書		教科書を指定しない												
参考書		参考書を指定しない												

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	小論文評価		90%	○	○								
	講義中の意見交換内容の評価		10%	○	○								
注意事項	なし												
備考	なし												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	医療機器を用いた診療や新規医療機器の開発のための実験など												
実務経験を いかした教育内容	開発中の機器や実際に現場で使用されている機器を扱うことにより、問題点や課題を認識し、研究方法や方向性についての討論を行う。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式							
HH42M008		公衆衛生学特論 (Public Health and preventive medicine)					医療関連科目群		オンライン(同時双方向型、オンデマンド)							
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	前期	金6	日本語				複数(共同)						
担当教員	氏名 斉藤功、山岡吉生															
	E-mail saitoi@oita-u.ac.jp 内線 5735															
授業の概要	自然科学としての医学とその応用としての医療は、社会とのつながりの中で人々の役に立つ。現在の我が国は、超高齢社会やがん、メタボリック症候群などの問題に直面している。加えて、世界的には感染症や環境汚染等の未解決の問題が山積しており、その対策への我が国の貢献が期待されている。これらの問題を理解し解決するために必要な公衆衛生的な考え方の基礎を固めることを目標とする。															
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	
目標1	現代社会の公衆衛生的問題とそれらに対するアプローチの概要を説明できる。								○	○						
目標2	疫学研究に必要な統計解析を適切に行い、結果を解釈することができる。								○	○						
目標3	現代の公衆衛生学研究の最新動向の概要を説明できる。								○	○						
目標4																
目標5																
目標6																
目標7																
目標8																
目標9																
目標10																
各DPへの関連度(計10)									7	3						
授業の内容																
1 公衆衛生学総論(斉藤)																
2 疫学の方法論(斉藤)																
3 疫学演習(斉藤)																
4 公衆衛生学の最前線「循環器疾患」(斉藤)																
5 栄養疫学(船越・斉藤)																
6 身体活動(船越・斉藤)																
7 生活習慣(船越・斉藤)																
8 保健指導(船越・斉藤)																
9 がん(山岡)																
10 感染症(山岡)																
11 公衆衛生学の最前線④「発展途上国に対する医療協力」(山岡)																
12 公衆衛生学の最前線⑤「分子疫学」(山岡)																
13 公衆衛生学の最前線⑥「感染症としての胃がん研究」(山岡)																
14 症例検討(山岡)																
15 症例検討(山岡)																
ライクニング	A:知識の定着・確認		課題に対する意見交換を行うためグループディスカッションを実施する				工夫その他の	実践的な講義を実施する。								
	B:意見の表現・交換															○。
	C:応用志向															
	D:知識の活用・創造															
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		事前に配布した資料を使っでの予習の実施(15h)													
	事後学修		事前に配布した資料を使っでの復習の実施(30h)													
	想定時間合計		45													
教科書	教科書を指定しない															
参考書	参考書を指定しない															

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	各課題のレポート		80%	○	○	○							
	小テスト		20%	○	○	○							
注意事項	なし												
備考	なし												
リンク													
	URL												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式							
HH42W009		医療福祉特論 (Social Work in Health Care)					福祉関連科目群		オンライン(同時双方向型)							
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	前期	金6	日本語				単独						
担当教員	氏名 菱岡悦子															
	E-mail fukusigakumu@oita-u.ac.jp 内線 6120															
授業の概要	本科目は、保健医療や医療福祉の領域におけるソーシャルワークの実践や諸課題をソーシャルワークの基本原則・理論に照らして理解することを目的とする。授業では、受講者(各回の担当者)が様々な文献やデータを踏まえたレジュメを用いて報告し、受講者と教員とで議論し、上記の理解を深める。また、改善が必要な事項については、今後のあり方を検討する。															
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7
目標1 保健医療や医療福祉におけるソーシャルワーク実践や諸課題をソーシャルワークの基本原則・理論に照らして理解し、説明する。										○	○					
目標2 自己の価値観を大切にしつつ、価値観が異なる他者と対話できる視点を養い、実践する。										○	○					
目標3																
目標4																
目標5																
目標6																
目標7																
目標8																
目標9																
目標10																
各DPへの関連度(計10)										5	5					
授業の内容																
1	オリエンテーション															
2	医療ソーシャルワーク概論															
3	研究論文の動向(2021年度)1															
4	研究論文の動向(2021年度)2															
5	研究論文の動向(2022年度)1															
6	研究論文の動向(2022年度)2															
7	研究論文の動向(2023年度)1															
8	研究論文の動向(2023年度)2															
9	児玉真美『安楽死が合法の国で起きていること』(ちくま新書)講読1															
10	児玉真美『安楽死が合法の国で起きていること』(ちくま新書)講読2															
11	児玉聡『実践・倫理学』(勁草書房)講読1															
12	児玉聡『実践・倫理学』(勁草書房)講読2															
13	会田薫子『長寿時代の医療・ケア』(ちくま新書)講読1															
14	会田薫子『長寿時代の医療・ケア』(ちくま新書)講読2															
15	講義のまとめと振り返り															
ラーニング	A:知識の定着・確認		○	各回で指定された文献を批判的に読み解き、担当学生による報告とディスカッションを通して自分の考えを深めていくことを学ぶ。				工夫	その他の							
	B:意見の表現・交換		○													
	C:応用志向															
	D:知識の活用・創造															
授業時間外学修内容 と想定時間	準備学修		1. テーマに関連する文献(英語論文を含む)をできるだけ多く読み、文献概要のレジュメを作成してください。またメディア等を通じて保健・医療をめぐる日本また世界の現状と課題に目を向けてみてください。(15h)													
	事後学修		2. 講義を通じて得た学びを振り返り、またメディア等を通じて関連する保健・医療をめぐる日本また世界の現状と課題に関心を寄せてください。(18h)													
	想定時間合計		33													
教科書	教科書は指定しない。															
参考書	1. 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟編。保健医療と福祉。中央法規, 2021. ISBN-13 : 978-4805882481 2. 岩淵豊。日本の医療。中央法規, 2015. ISBN 978-4-8058-5246-0															

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	システマティック レビューを踏まえたレジュメを作成することができる。		25%	○	○								
	クリティカル シンキングおよび論理的思考を踏まえた解釈をすることができる。		25%	○	○								
	レジュメに基づいた報告を行うことができ、互いの報告について討論を行うことができる。		25%	○	○								
	ソーシャルワークの原則を理解し、保健医療等の課題に対応する力を涵養することができる。		25%	○	○								
注意事項	医療ソーシャルワークの諸課題について、自らの関心に引き寄せて考えていただければと思います。講義内容と実践の場の現状を比較し、各自、実務のあり方を検討してください。												
備考													
リンク	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	医療ソーシャルワーカー												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42P024		臨床動作法特論 (Special Seminar on Dohsa-hou)					心理関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択	2	1・2	大学院福祉健康科学研究科	前期	金6	日本語		複数(共同)						
担当教員	氏名 池永恵美、古長治基													
	E-mail m-ikenaga@oita-u.ac.jp 内線 6107													
授業の概要	臨床動作法は、言語ではなく動作を媒介とする日本独自の非常にユニークな臨床心理学的援助技法である。本授業では、臨床動作法の理論や実践について講義・演習を行い、臨床動作法の実施に必要な知識を身につける。また基本的な援助者の態度や技術について学び、修得することを目的とする。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 臨床動作法の概要・理論について説明できる。								○						
目標2 臨床動作法と他の臨床心理学的援助技法とを比較し、その共通点や違い・独自性について説明できる。								○						
目標3														
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								10						
授業の内容														
1 臨床動作法の理論と歴史														
2 リラクセーション課題の意味														
3 タテ系課題の意味														
4 ひとの姿勢・動作を見立てる(座位・ひざ立ち)														
5 ひとの姿勢・動作を見立てる(立位・歩行)														
6 ひとの動作を援助するとはー臨床心理学的意義ー														
7 適切な援助について考える(目標設定、援助量、援助の仕方)														
8 適切な援助について考える(共動作と共体験)														
9 リラクセーション課題の実践(軀幹のひねり)														
10 リラクセーション課題の実践(肩周りの弛め)														
11 リラクセーション課題の実践(前屈)														
12 リラクセーション課題の実践(腰周りの弛め)														
13 タテ系動作課題の実践(座位)														
14 タテ系動作課題の実践(ひざ立ち)														
15 タテ系動作課題の実践(立位・歩行)														
ラーニング	A:知識の定着・確認		○体験学習、調べ学修、ディスカッション、相互教授、学びの省察、ロールプレイ、事例研究	工夫その他の	実際に障害児者の方たちに協力していただき、臨床動作法実践の場を設ける。臨床動作法実践を通じて、臨床動作法を体験的・実践的に学び、理解を深める。									
	B:意見の表現・交換													
	C:応用志向													
	D:知識の活用・創造													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修													
	事後学修		授業内で実施した動作課題について学生同士で実技の実習をしておくこと(15h)。臨床動作法についての理解を深めるため、臨床動作法に関する事例論文や書籍を読むこと(30h)。											
	想定時間合計		45											
教科書	特になし。													
参考書	「臨床動作法」成瀬悟策 誠信書房(2016年)ISBN978-4-414-40100-4 「基礎から学ぶ動作訓練」九州大学発達臨床心理センター編 ナカニシヤ出版(1998年)ISBN978-4-88848-472-5													

成績 評価 方法 及び 評価 割合	評価方法		割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10
	授業および課題への取り組み		50%	○	○								
	レポート		50%	○	○								
注意事項	受講は臨床心理学コースの大学院生に限る。												
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得のためのE群科目である。												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務 経験	公認心理師・臨床心理士												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH13Z001		福祉健康科学特別演習Ⅰ (Seminar in Welfare and Health SciencesⅠ)							対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
必修	2	1	福祉健康科学 研究科	通年	他	日本語	英語	クラス分け						
担当教員	氏名 全教員													
	E-mail fukusigakumu@oita-u.ac.jp 内線 6120・6125													
授業の概要	学位論文研究への着手を促すことを目的として、3コースが合同で研究紹介および構想発表（研究テーマや研究計画を中心とした発表）を行うとともに指導やディスカッションもあわせて行う。これにより、健康医科学・福祉社会科学・心理学に関する知識や視点をいかした幅広い研究指導を行う。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	健康医科学・福祉社会科学・心理学を見渡した領域横断的な研究の意義と研究倫理を理解することができる。							○	○					
目標2	医科学を含め、様々な研究のアプローチを理解し、自らの研究の意義を考えることができる。							○	○					
目標3	構想発表において、学位論文研究のテーマや研究計画等の構想を効果的にプレゼンテーションできる。							○	○					
目標4	他領域の教員・学生とのディスカッションを通じて、自らの研究に関する理解を深めたり修正したりすることができる。							○	○					
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度（計10）								5	5					
授業の内容														
1 領域横断型研究に向けてのガイダンスと研究倫理														
2 研究紹介とディスカッション①：健康医科学領域														
3 研究紹介とディスカッション①：健康医科学領域														
4 研究紹介とディスカッション②：福祉社会科学領域														
5 研究紹介とディスカッション②：福祉社会科学領域														
6 研究紹介とディスカッション③：心理学領域														
7 研究紹介とディスカッション③：心理学領域														
8 様々なアプローチ（エビデンスとナラティブ、量的研究と質的研究、仮説検証型研究と仮説生成型研究等）														
9 構想発表とディスカッション														
10 構想発表とディスカッション														
11 構想発表とディスカッション														
12 構想発表とディスカッション														
13 構想発表とディスカッション														
14 構想発表とディスカッション														
15 構想発表とディスカッション														
ラーニングポイント	A:知識の定着・確認		他者との討議を通して、より深い理解と主体的な学びを促す。	工 夫 の 他 の	ディスカッションを取り入れることにより、より深い理解と主体的な学びを促す。									
	B:意見の表現・交換													
	C:応用志向													
	D:知識の活用・創造													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		検討の進捗にあわせて指示する。毎回において明確になった課題や論点について関連する論文等を精読する等の学習を行うこと。(30h)											
	事後学修		検討の進捗にあわせて指示する。毎回において明確になった課題や論点について関連する論文等を精読する等の学習を行うこと。(30h)											
	想定時間合計		60											
教科書		なし。資料は適宜配付する。												
参考書		検討の進捗にあわせて指示する。												

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	構想発表		50%	○	○	○	○						
	授業への積極的な参加		50%	○	○	○	○						
注意事項	受講生には積極的な参加を求める。												
備考	研究紹介の各回は、3コースの教員が当該分野の研究テーマや動向について紹介し、それに基づくディスカッションを行う。構想発表の各回は、3コースの教員と学生が集まり、一人30分程度で研究構想の発表をし、それに基づくディスカッションを行う。												
リンク													
	URL												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式								
HH13Z002		福祉健康科学特別演習Ⅱ (Seminar in Welfare and Health SciencesⅡ)							対面								
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態								
必修		2	1	福祉健康科学 研究科	通年	他	日本語	英語	クラス分け								
担当教員	氏名 全教員																
	E-mail fukusigakumu@oita-u.ac.jp 内線 6120・6125																
授業の概要	学位論文研究の深化・展開を助け、実りある成果へとつなげることを目的として、3コースが合同で中間発表および最終発表を行う。その過程では、研究計画の修正・追加や研究成果の明確化に関する指導やディスカッションもあわせて行う。これにより、健康医科学・福祉社会科学・心理学に関する知識や知見をいかした幅広い研究指導を行う。																
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7	
目標1 医科学を含め、様々な研究のアプローチを理解し、自らの研究の意義を明確にすることができる。										○	○						
目標2 中間発表及び最終発表構想発表において、学位論文研究の進捗状況や成果を効果的にプレゼンテーションできる。										○	○						
目標3																	
目標4																	
目標5																	
目標6																	
目標7																	
目標8																	
目標9																	
目標10																	
各DPへの関連度 (計10)										5	5						
授業の内容																	
1	1) 研究構想発表会に関する事項																
2	事前準備 (発表資料作成、予行会)、討議 など																
3	発表会への参加、発表、討議 など																
4	発表後の対応の検討 など																
5	2) 中間発表会に関する事項																
6	事前準備 (発表資料作成、予行会)、討議 など																
7	発表会への参加、発表、討議 など																
8	発表後の対応の検討 など																
9	3) 最終発表会に関する事項																
10	事前準備 (発表資料作成、予行会)、討議 など																
11	発表会への参加、発表、討議 など																
12	発表後の対応の検討 など																
13																	
14																	
15																	
ラーニング	A:知識の定着・確認		討議を通して、研究内容を研鑽し、より深い理解と主体的な学びを促す工夫その他の				ディスカッションを取り入れることにより、より深い理解と主体的な学びを促す。										
	B:意見の表現・交換	○。															
	C:応用志向																
	D:知識の活用・創造	○															
授業時間外 学修の内容 と想定時間	準備学修	研究の進捗にあわせて指示する。(30h)															
	事後学修	研究の進捗にあわせて指示する。(30h)															
	想定時間合計	60															
教科書	なし。資料は適宜配付する。																
参考書	検討の進捗にあわせて指示する。																

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	中間・最終発表	70%	○	○								
	授業への積極的な参加	30%	○	○								
注意事項	受講生には積極的な参加を求める。											
備考	中間発表の各回は、3コースの教員と学生が集まり、一人30分程度で研究の進捗状況等の発表と、それに基づくディスカッションを行う。最終発表の各回は、3コースの教員と学生が集まり、一人30-40分程度で研究成果の発表と、それに基づくディスカッションを行う。											
リンク												
	URL											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH13Z003		福祉健康科学特別研究Ⅰ (Seminar in Psychological ResearchⅠ)							対面						
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
必修		4	1	福祉健康科学 研究科	通年	他	日本語	英語	複数(共同)、クラス分け						
担当 教員	氏名 全教員														
	E-mail fukusigakumu@oita-u.ac.jp 内線 6120・6125														
授業の 概要	所属するゼミを中心として、学位論文研究に取りかかる。具体的には、専門領域に関する研究倫理について指導を行うとともに、専門領域に関する先行研究の精読・分析・ディスカッションを重ね研究領域の理解(どのような研究がなされているのか)と研究課題の探究(どのような研究ができるのか)を進める。さらに、学位論文研究のテーマの検討(研究で何を明らかにしたいのか)と、研究計画の具体化・精緻化(どのように研究を進めるのか)を進め、研究の構想を明確にする。その過程では、研究の内容に応じて、関連する他の教員による指導を行う。														
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 領域固有の研究倫理を理解することができる。									○	○					
目標2 専門分野に関するこれまでの研究の動向を十分把握し、学位論文研究の方向を明確にすることができる。									○	○					
目標3 研究計画(実験や調査のデザイン、分析方法の選択、仮設の設定等)を明確にすることができる。									○	○					
目標4 自らの学位論文研究のオリジナリティを考えることができる。									○	○					
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)									5	5					
授業の内容															
1 専門分野に関する「倫理教育」を行った上で、個々の学生の研究テーマや研究手法、あるいは研究の進捗状況に応じて、以下の内容を組み合わせる															
2 ①「専門分野の先行研究の収集・整理・分析」															
3 ②「研究テーマの検討・決定」															
4 ③「研究方法や分析方法の検討・決定」															
5 ④「仮説の立案」															
6 ⑤「研究計画に関する倫理面の検討」															
7 ⑥「予備実験・予備調査等の実施」															
8 教員及び研究指導する専門領域は別紙のとおり															
9															
10															
11															
12															
13															
14															
15															
ラー ニング ポイント	A:知識の定着・確認		○	各自の研究を遂行するために必要な情報収集、研究方法を学修し、研究				工夫 その他	個々の学生の状況に応じて、ディスカッションや少人数指導を行い、より深い理解と主体的な学びを促す。						
	B:意見の表現・交換		○	を実施する。											
	C:応用志向		○	他者との討議により、思考を深める。											
	D:知識の活用・創造		○												
授業時間外 学修の内容 と想定時間	準備学修		検討の進捗にあわせて指示する。各回において明確になった課題や論点について関連する論文等を精読する等の学習を行うこと。(30h)												
	事後学修		検討の進捗にあわせて指示する。各回において明確になった課題や論点について関連する論文等を精読する等の学習を行うこと。(30h)												
	想定時間合計		60												
教科書		なし。資料は適宜配付する。													
参考書		研究の進捗にあわせて指示する。													

成績 評価 の 方法 及び 評価 割合	評価方法		割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10
	報告内容、討議への参加態度などを含む研究活動の総合的評価		100%	○	○	○	○						
注意事項		なし。											
備考		なし。											
リンク													
		URL											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式						
HH13Z004		福祉健康科学特別研究Ⅱ (Seminar in Psychological ResearchⅡ)							対面						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態							
必修	4	2	福祉健康科学 研究科	通年	他	日本語	英語	複数(共同)、クラス分け							
担当教員	氏名 全教員														
	E-mail fukusigakumu@oita-u.ac.jp 内線 6120・6125														
授業の概要	所属するゼミを中心として、学位論文研究を進展させる。具体的には、「福祉健康科学特別研究Ⅰ」での取組に基づき、適宜研究計画の深化・修正・追加を加えながら実験や調査を進めるとともに、得られたデータの分析や仮説の検証を行い、考察の深化や研究成果のまとめを進める。その過程では、研究の内容に応じて、関連する他の教員による指導を行う。また、専門領域に関する研究倫理に照らして確認・指導を行う。														
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	
目標1	計画に即して学位論文研究を進めるとともに、計画に適切な修正を加えることができる。							○	○						
目標2	得られたデータに基づき考察を展開し、専門的な知見を示すことができる。							○	○						
目標3	自らの学位論文研究のオリジナリティを明確にすることができる。							○	○						
目標4	自らの学位論文研究について研究公正を確かなものとすることができる。							○	○						
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度 (計10)								5	5						
授業の内容															
1	個々の学生の研究テーマや研究手法、あるいは研究の進捗状況に応じて、以下の内容を組み合わせる														
2	①「研究計画の実行あるいは修正」														
3	②「データの収集」														
4	③「データの分析」														
5	④「仮説の検証と考察」														
6	⑤「倫理面の検討」														
7															
8															
9															
10															
11															
12															
13															
14															
15															
ラ イ ク ニ ン グ	A:知識の定着・確認		各自の研究を遂行するために必要な情報収集、研究方法を学修し、研究			工 夫 そ の 他 の	個々の学生の状況に応じて、ディスカッションや少人数指導を行い、より深い理解と主体的な学びを促す。								
	B:意見の表現・交換	○	を実施する。												
	C:応用志向		他者との討議により、思考を深める。												
	D:知識の活用・創造	○													
授業時間外 学修の内容 と想定時間	準備学修	研究の進捗にあわせて指示する。(30h)													
	事後学修	研究の進捗にあわせて指示する。(30h)													
	想定時間合計	60													
教科書	なし。資料は適宜配付する。														
参考書	研究の進捗にあわせて指示する。														

成績 評価 の 方法 及び 評価 割合	評価方法		割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10
	報告内容、討議への参加態度などを含む研究活動の総合的評価		100%	○	○	○	○						
注意事項		なし。											
備考		なし。											
リンク													
		URL											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式					
HH42W005		高齢者福祉特論 (Elderly welfare)					福祉関連科目群		オンライン（同時双方向型、オンデマンド）					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語		その他に使用する言語		担当形態				
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期	他	日本語				単独				
担当教員	氏名 中山慎吾													
	E-mail nakayama-shingo@oita-u.ac.jp 内線 7518													
授業の概要	高齢社会、高齢者福祉の現状と関連する諸課題(人口高齢化、社会参加、健康・介護等)について、資料等に基づき、理解し考察する。主に『高齢社会白書』の内容に沿って進める予定である。可能であれば、英語の文献等についても、関連して意味のある文献を取り上げ、参考にしていく。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 人口高齢化の現状について理解し考察することができる。								○						
目標2 高齢者の社会参加や社会的交流について理解し考察することができる。								○						
目標3 高齢者の健康や介護について理解し考察することができる。								○						
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度(計10)								10						
授業の内容														
1 高齢福祉における介入の3つのレベル														
2 高齢者福祉における介入役割と基礎実践技術														
3 社会問題、政策と高齢者														
4 高齢者福祉の様々な対象者														
5 高齢化の現状														
6 高齢者と家族・世帯														
7 高齢者と就業・所得(概観)														
8 高齢者と就業・所得(国際的に見た日本の現状)														
9 これまでの補足等														
10 高齢者と健康・福祉(健康面)														
11 高齢者と健康・福祉(福祉面)														
12 高齢者と健康・福祉(その他)														
13 高齢者と学習・社会参加(概観)														
14 高齢者と学習・社会参加(実践例)														
15 これまでの補足・まとめ														
ラーニングチェックポイント	A:知識の定着・確認		Moodleを活用して中間レポートを互いに読み、意見交換を行う。				工夫その他の	関連する資料、論文、ホームページ等なるべく多く紹介する。						
	B:意見の表現・交換													
	C:応用志向													
	D:知識の活用・創造													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		指定された資料を熟読しておくこと(10h)											
	事後学修		指定された資料を熟読し、課題に取り組むこと。(35h)											
	想定時間合計		45											
教科書		必要があればMoodleまたはメール等で連絡します。												
参考書		内閣府『高齢社会白書 令和5年版』、日経印刷、2023年、ISBN9784865793765。 東京大学高齢社会総合研究機構『地域包括ケアのまちづくりー老いても安心して住み続けられる地域を目指す総合的な試み』東京大学出版会、2020年、ISBN97841330604161。												

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業レポート		100%	○	○	○							
注意事項	オンデマンドで行う予定ですが、15回のうち3回程度、Zoomでの授業を行う可能性があります（その場合受講者にメール等で連絡します）。Moodleの科目欄に授業内容を表示します。												
備考													
リンク													
	URL												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH42W008		生活困窮者支援特論 (Self-Support of Needy Person)					福祉関連科目群		対面						
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語		担当形態					
選択		2	1・2	福祉健康科学研究科	集中	他	日本語	英語		単独					
担当教員	氏名 志賀信夫														
	E-mail nobu-shiga@oita-u.ac.jp 内線 7727														
授業の概要	生活困窮者支援について理解するためには、「貧困とは何か」について理解しておく必要がある。 本講義では、「貧困とは何か」という問いから出発し、この問いに対する回答を模索するなかで、貧困及び生活困窮にかかわる諸概念の整理を行い、この整理に立脚して、ミクロ、メゾ、マクロレベルの支援について検討していく。														
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7
目標1	貧困および生活困窮ついて、関係する諸概念の整理をおこない、マクロ・メゾ・ミクロの位相で捉えることができる。								○	○					
目標2	貧困および生活困窮について、政策と実践の両面から具体的な問題・課題を分析することができる。								○	○					
目標3	貧困理論の歴史について理解し、自分なりに説明できる。								○	○					
目標4	新自由主義批判と資本主義批判の違いについて理解できる。								○	○					
目標5	社会的共通資本、コモン、ベーシック・サービスの違いについて理解し、自分なりに説明できる。								○	○					
目標6	貧困理論と福祉実践の連関について考え、議論できる。								○	○					
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)								5	5						
授業の内容															
1	貧困の概念、定義、測定														
2	貧困、格差、不平等の概念的区別														
3	絶対的貧困理論														
4	相対的貧困理論														
5	社会的排除理論														
6	貧困理論の変遷と今日の到達点														
7	貧困理論から考える子どもの貧困問題														
8	貧困理論から考える生活保護制度														
9	貧困理論から考える生活保護制度														
10	階層論的貧困理論と階級論的貧困理論														
11	本源的蓄積と本源的無所有														
12	ベーシックインカムとベーシックサービス														
13	社会的共通資本とコモンズ														
14	脱貧困と反貧困														
15	まとめ ―今後の生活困窮者支援のあり方														
ラーニング目標	A:知識の定着・確認	○					エ そ 夫 他 の	○生活困窮に関する具体的な事例を映像や資料により紹介し、問題の背景となる社会的要因について理解を促す。 ○ディスカッションを取り入れることにより、問題・課題の多角的な理解と主体的な学びを促す。							
	B:意見の表現・交換	○													
	C:応用志向	○													
	D:知識の活用・創造	○													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修		指定された資料・論文・文献を熟読しておくこと。(30h)												
	事後学修		講義で学習した内容を復習する。(30h) 生活困窮者支援策について文章化する。												
	想定時間合計		60												
教科書	志賀信夫(2025)『貧困とは何か』ちくま新書。ISBN:978-4-480-07669-4														
参考書	特になし。														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	レポート		60%	○									
	講義課題		40%		○								
注意事項	特になし												
備考	特になし												
リンク													
	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	○NPO法人を設立（生活困窮者支援）。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH42P007		司法・犯罪心理学特論(司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開) (Special Seminar in Forensic and Criminal Psychology(Support Theory and Applications in Forensics and Criminology Area))					心理関連科目群		オンライン(同時双方向型)						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語		担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学研究科	後期集中	他	日本語			単独						
担当教員	氏名 宇都宮敦浩														
	E-mail fukusigakumu@oita-u.ac.jp 内線														
授業の概要	司法・犯罪分野における根拠法令や関係法令について基礎的な知識を身に付け、法的な枠組みや各種司法制度について理解を深めるとともに、犯罪心理学、犯罪精神医学、犯罪社会学、少年非行等に関する犯罪理論や再犯防止のための処遇、リスクアセスメント、心理テストの活用、鑑別と鑑定、加害者家族への支援と現状等の各論について学び、司法・犯罪分野に関する理論と支援について学習する。														
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	
目標1	司法・犯罪領域において生じる問題及びその背景について説明できる。							○	○						
目標2	司法・犯罪領域における心理社会的課題とその心理的支援のあり方について説明できる。							○	○						
目標3	司法・犯罪臨床における心理職のあり方ならびに関係機関との連携について説明できる。							○	○						
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)								5	5						
授業の内容															
1 司法・犯罪分野における各種専門職(家庭裁判所調査官、法務技官等)の概要及び他職種・多職種連携															
2 少年法と関連する法律の概要															
3 統計資料に基づく非行・犯罪動向の概観															
4 犯罪・非行のメカニズム①～古典的犯罪理論、精神分析学派、社会心理学派等															
5 犯罪・非行のメカニズム②～発達の視点からの犯罪理論、情緒障害理論、対人成熟理論等															
6 犯罪・非行のメカニズム③～最新の犯罪理論に基づいた再犯防止対策															
7 犯罪社会学から見たアプローチ															
8 薬物依存者についての理解と集団療法															
9 女性犯罪の特徴と支援を巡って															
10 少年鑑別所における心理臨床															
11 性犯罪者のリスクアセスメントと処遇															
12 犯罪被害者支援															
13 加害者家族の現状と支援															
14 矯正施設における心理テストの活用事例															
15 非行・犯罪ケースの事例検討															
ラーニング	A:知識の定着・確認	○	小テストの実施と答え合わせによる自己評価				工夫その他の	視聴覚教材の活用や実際に体験的してみる能動的学習を通じて、学生の動機づけを高め、深い学びに導く。							
	B:意見の表現・交換	○	省察ミニッツペーパーを通じた担当教員との質疑応答												
	C:応用志向														
	D:知識の活用・創造														
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	授業時の指示に基づき予習する(10h) 配布資料を事前に読んでおく(10h)													
	事後学修	講義ノートで復習する(10h) 授業中の指示に基づき省察ミニッツペーパーなど課題にとりくむ(10h) 最終 レポート課題に取り組む(5h)													
	想定時間合計	45													
教科書	使用しない。適宜資料を配布する。														
参考書	講義中に適宜紹介する。														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への取り組みおよびライディング	60%	○	○								
	最終レポート	40%	○	○								
注意事項	なし											
備考	この科目は臨床心理士受験資格取得に関するC群科目であり、公認心理師受験資格取得に関する必修科目である。											
リンク	URL											
担当教員の実務経験の有無	○											
教員の実務経験	昭和63年から平成27年まで法務省所管の少年鑑別所・刑事施設に法務技官（心理）として27年間勤務											
実務経験をいかした教育内容	少年鑑別所における非行少年の資質鑑別業務、刑事施設における性犯罪者調査業務、検察庁から依頼された精神鑑定における鑑定助手等の実務経験から、加害者を対象とした心理臨床の特殊性や留意点等について理解を深める。											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式					
HH42P011		教育心理学特論 (Special seminar of educational psychology)					心理関連科目群		対面					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択	2	1・2	福祉健康科学 研究科	前期	他	日本語		単独						
担当教員	氏名 小野貴美子 E-mail fukusigakumu@oita-u.ac.jp 内線 学外非常勤講師のため未記入													
授業の概要	日々の教育を考えるに当たって重要なテーマ（発達、学習、教育評価、学校カウンセリング、障害者(児)）を中心に、教育の過程に関する教育心理学的な知見と方法を得るとともに、福祉健康科学の専門職として教育に対する深い理解と教育実践の指導に活用できることを目的とする。													
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1	教育の過程に関する教育心理学の理論と方法を説明できる。							○	○					
目標2	教育における諸問題を理解し、その克服のための指導のあり方を提案できる。							○						
目標3	福祉健康科学の専門職として教育心理学的な知見を活用できる。								○					
目標4														
目標5														
目標6														
目標7														
目標8														
目標9														
目標10														
各DPへの関連度 (計10)								6	4					
授業の内容														
1 教育実践への教育心理学のアプローチ（自己紹介とグループディスカッション）														
2 授業のタイプと学習効果（グループディスカッション）														
3 分かる授業（グループディスカッション）														
4 授業の目標と構成（グループディスカッション）														
5 学習意欲とその支援（グループディスカッション）														
6 自律的な学習者の育成（グループディスカッション）														
7 教育における評価と測定（グループディスカッション）														
8 学習集団の特徴と教師の役割（グループディスカッション）														
9 生徒指導の機能と意義（グループディスカッション）														
10 学校心理学の考え方（グループディスカッション）														
11 教育相談の理論（グループディスカッション）														
12 教育相談の実際 ロールプレイ（グループディスカッション）														
13 発達障がい理解（グループディスカッション）														
14 特別な教育的ニーズがある子どもへの支援（グループディスカッション）														
15 社会的自立とキャリア教育・道徳教育（グループディスカッション）														
ラーニングポイント	A:知識の定着・確認	☐	主体的な調べ学習、			工夫その他の	自主的な調べ学習、レポート作成、およびグループディスカッションを活用して、深い学びに導く。							
	B:意見の表現・交換	☐	発表、およびグループディスカッション、ロールプレイ、レポート作成											
	C:応用志向	☐												
	D:知識の活用・創造	☐												
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	各章を読み込み、疑問や課題についての調べ学習と発表のためのレジュメ・提示資料作成（20h）												
	事後学修	調べ学習と発表にもとづいたレポートの作成（25h）												
	想定時間合計	45												
教科書	進藤聡彦、丸山広人「教育心理学特論」NHK出版 2024年 ISBN978-4-595-14201-7													
参考書	指定しない。領域・テーマごとに関係する書籍・論文を適宜紹介する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	授業への積極的参加（調べ学習の取り組み、ディスカッションへの参加度など）	30%	○									
	調べ学習にもとづく課題別レポート	30%		○	○							
	最終レポート	40%	○	○	○							
注意事項	なし											
備考	なし											
リンク												
	URL											
担当教員の 実務経験の有無	○											
教員の 実務経験	臨床心理士、公認心理士											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)		授業形式						
HH42P020		臨床心理応用実習 A (心理実践実習 B) (Advanced Training in Clinical Psychology A(Practical Training in Psychology B))					心理関連科目群		対面						
必修選択		単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語	担当形態						
選択		3	1	福祉健康科学研究科	通年	他	日本語	英語	複数(共同)						
担当教員	氏名 渡邊亘, 溝口剛, 河野伸子, 池永恵美, 志方亮介, 古長紗恵, 増田成美														
	E-mail watanabe-harumi@oita-u.ac.jp 内線 7894														
授業の概要	教育分野および福祉分野の学外施設において、施設の取組を学ぶとともに、実習指導者等の指導を受けながら心理支援を担当し、心理専門職の実務を習得する。具体的には、当該分野の特徴や役割を踏まえつつ、心理学的理解と支援計画の策定、心理支援やチームアプローチの実際、多職種連携と地域連携、職業倫理及び法的義務といった内容について学ぶ。なお、教育分野の学外施設として教育支援センター(適応指導教室)、福祉分野の学外施設として児童相談所もしくは精神保健福祉センターにおいて実習を行う。														
具体的な到達目標								DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7
目標1 教育分野・福祉分野における心理専門職の実務について説明できる。									○						
目標2 教育分野・福祉分野における心理専門職と多職種連携について説明できる。									○						
目標3															
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度 (計10)									10						
授業の内容															
1 オリエンテーション (実習の目的と進め方・注意事項・倫理等)															
2 教育機関における実習 (機関の長や施設指導者によるレクチャー)															
3 教育機関における実習 (要支援者の理解)															
4 教育機関における実習 (機関の主要な取組：不登校・いじめ・発達障害等)															
5 教育機関における実習 (要支援者への心理支援)															
6 教育機関における実習 (要支援者への心理支援)															
7 教育機関における実習 (地域連携とチームアプローチ)															
8 教育機関における実習 (まとめ・省察・今後の課題)															
9 福祉機関における実習 (機関長や支援担当者によるレクチャー)															
10 福祉機関における実習 (機関長や支援担当者によるレクチャー)															
11 福祉機関における実習 (機関の主要な取組：虐待・判定業務／ひきこもり・復職支援・デイケア等)															
12 福祉機関における実習 (要支援者への心理支援)															
13 福祉機関における実習 (要支援者への心理支援)															
14 福祉機関における実習 (地域連携とチームアプローチ)															
15 福祉機関における実習 (まとめ・省察・今後の課題)															
ラ ア ク テ ニ ン グ	A:知識の定着・確認		○教育分野の学外施設において、実習指導者等の指導を受けながら、対象児者への心理支援、心理検査、心理面接、陪席等を行い、心理学的理解と支援計画の策定、地域支援、多職種連携と地域連携、職業倫理及び法的義務といった内容について学ぶ。				工 夫 そ の 他 の	「履修ガイド」や学習支援システム (moodle) を積極的に活用し、学習の成果と課題を明確にしつつ、系統的に学びを積み上げていくことを助ける。							
	B:意見の表現・交換														
	C:応用志向														
	D:知識の活用・創造														
授業時間外 学修の内容 と想定時間	準備学修		「授業の内容」に関する課題を課す。詳細は実習において指示する。(15h)												
	事後学修		「授業の内容」に関する課題を課す。詳細は実習において指示する。(30h)												
	想定時間合計		45												
教科書		「新版 心理臨床家の手引き」 鍾幹八郎ほか 誠信書房 (2000年) (ISBN:9784414416435)													
参考書		実習施設に関する関係資料等を配布する。詳細は実習において指示する。													

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	上記の内容に関する実習への取り組み	50%	○	○								
	毎回の実習報告書	25%	○	○								
	まとめレポート	25%	○	○								
注意事項	実習に関する注意事項は別途指示する。 受講は臨床心理学コースの大学院生に限る。											
備考	この科目は臨床心理士及び公認心理師受験資格取得のための必修科目である。											
リンク	URL											
担当教員の 実務経験の有無	○											
教員の 実務経験	臨床心理士・公認心理師（渡邊亘，溝口剛，河野伸子，池永恵美，渡邊晴美，志方亮介，古長紗恵，増田成美）											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)		授業形式						
HH42P021		臨床心理応用実習B(心理実践実習C) (Advanced Training in Clinical Psychology B(Practical Training in Psychology C))					心理関連科目群		対面						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	主に使用する言語	その他に使用する言語		担当形態						
選択	2	2	福祉健康科学研究科	通年	他	日本語	英語		複数(共同)						
担当教員	氏名 渡邊亘, 溝口剛, 河野伸子, 池永恵美, 渡邊晴美, 志方亮介, 古長紗恵, 増田成美														
	E-mail watanabe-harumi@oita-u.ac.jp 内線 7894														
授業の概要	医療分野の学外施設において、施設の取組を学ぶとともに、実習指導者等の指導を受けながら心理支援を担当し、心理専門職の実務を習得する。具体的には、当該分野の特徴や役割を踏まえつつ、心理学的理解と支援計画の策定、心理支援やチームアプローチの実際、多職種連携と地域連携、職業倫理及び法的義務といった内容について学ぶ。なお、医療分野の学外施設として精神科病院において実習を行う。														
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	
目標1	医療分野における心理専門職の実務について説明できる。							○							
目標2	医療分野における心理専門職と多職種との連携について説明できる。							○							
目標3															
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
各DPへの関連度(計10)								10							
授業の内容															
1	オリエンテーション(実習の目的と進め方・注意事項・倫理等)														
2	医療機関における実習(精神科医やコメディカル等によるレクチャー)														
3	医療機関における実習(精神科外来陪席)														
4	医療機関における実習(精神科外来陪席)														
5	医療機関における実習(精神科カンファレンス、リエゾン)														
6	医療機関における実習(精神科カンファレンス、リエゾン)														
7	医療機関における実習(作業療法)														
8	医療機関における実習(作業療法)														
9	医療機関における実習(集団療法、デイケア、SST、CBT、マインドフルネス等)														
10	医療機関における実習(集団療法、デイケア、SST、CBT、マインドフルネス等)														
11	医療機関における実習(集団療法、デイケア、SST、CBT、マインドフルネス等)														
12	医療機関における実習(集団療法、デイケア、SST、CBT、マインドフルネス等)														
13	医療機関における実習(集団療法、デイケア、SST、CBT、マインドフルネス等)														
14	医療機関における実習(集団療法、デイケア、SST、CBT、マインドフルネス等)														
15	医療機関における実習(集団療法、デイケア、SST、CBT、マインドフルネス等)														
ラーニングゴール	A:知識の定着・確認	○	医療分野の学外施設において、実習指導者等の指導を受けながら、対象児者への心理支援、心理検査、心理面接、陪席等を行い、心理学的理解と支援計画の策定、地域支援、多職種連携と地域連携、職業倫理及び法的義務といった内容について学ぶ。					工夫その他の	「履修ガイド」や学習支援システム(moodle)を積極的に活用し、学習の成果と課題を明確にしつつ、系統的に学びを積み上げていくことを助ける。						
	B:意見の表現・交換	○													
	C:応用志向														
	D:知識の活用・創造	○													
授業時間外学修の内容と想定時間	準備学修	「授業の内容」に関する課題を課す。詳細は実習において指示する。(15h)													
	事後学修	「授業の内容」に関する課題を課す。詳細は実習において指示する。(30h)													
	想定時間合計	45													
教科書	「新版 心理臨床家の手引き」 鍾幹八郎ほか 誠信書房(2000)(ISBN:9784414416435)														
参考書	実習施設に関する関係資料等を配布する。詳細は実習において指示する。														

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	実習への取り組み	50%	○									
	毎回の実習報告書	25%	○									
	最終レポート	25%	○									
注意事項	実習に関する注意事項は別途指示する。 受講は臨床心理学コースの大学院生に限る。											
備考	この科目は臨床心理士及び公認心理師受験資格取得のための必修科目である。											
リンク	URL											
担当教員の 実務経験の有無	○											
教員の 実務経験	臨床心理士、公認心理師（渡邊亘、溝口剛、河野伸子、池永恵美、渡邊晴美、志方亮介、古長紗恵、増田成美）											